

平成29年度

障害者芸術文化活動 普及支援事業報告書

Annual Report

障害者芸術文化活動普及支援事業報告書

2018年3月 連携事務局

平成29年度
障害者芸術文化活動
普及支援事業報告書

目次

3	はじめに
4	「障害者芸術文化活動普及支援事業」とは
6	支援センターの取り組み
8	青森県 青森アール・ブリュットサポートセンター
10	秋田県 ポコラート アキタ
12	宮城県 SOUP (障害者芸術活動支援センター@宮城)
14	栃木県 とちぎアートサポートセンターTAM
16	埼玉県 アートセンター集
18	東京都 アーツサポ東京
20	神奈川県 特定非営利活動法人 スローレーベル
22	山梨県 山梨芸術活動支援ネットワーク・センター (YAN)
24	愛知県 Aichi Artbrut Network Center (AANC)
26	滋賀県 アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター (アイサ)
28	大阪府 国際障害者交流センター ビッグ・アイ
30	奈良県 障害とアートの相談室
32	和歌山県 和歌山県障害者芸術文化活動支援センター わがらあと
34	広島県 アートサポートセンターひゆるる
36	福岡県 障害者芸術文化活動普及支援事業所 SCORE
38	佐賀県 Saga ArtBrut Network Center (サンク)
40	長崎県 長崎パフォーマンスネットワークセンター
42	熊本県 障害者芸術文化活動支援センター@熊本
44	大分県 こみっとあーと
46	鹿児島県 かごしまアールブリュットセンター
48	広域センターの取り組み
48	北海道・北東北+宮城県 アールブリュット推進センターGently
50	南関東・甲信ブロック+栃木県 東京アール・ブリュットサポートセンター Rights
52	東海・北陸ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター
54	連携事務局の取り組み
56	全国連絡会議
60	広域センター不在ブロックのフォロー
61	未実施自治体向けの事業説明会
62	障害者芸術文化活動普及支援事業 報告会 美術
65	障害者芸術文化活動普及支援事業 報告会 舞台芸術
68	全国の取り組みを振り返って 美術 齋藤誠一 (社会福祉法人 グロー (GLOW) ~生きる事が光になる~)
70	全国の取り組みを振り返って 舞台芸術 鈴木京子 (社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会)
72	数値で見る実績
75	全国障害者数データ

はじめに

2017 (平成29) 年度の「障害者芸術文化活動普及支援事業」は、過去3年間実施された「障害者の芸術活動支援モデル事業」で培ったノウハウの全国展開・普及をもって、活動のさらなる振興を図ることを目的としてスタートしたものです。

モデル事業では美術分野のみが対象でしたが、本事業では舞台芸術分野も対象になり、全国20都府県の障害者芸術文化活動支援センターが、都道府県単位による障害者の芸術文化活動支援を展開し、それらの支援センターをブロック単位でサポートする広域センターが3団体誕生しました。

連携事務局を担わせていただいた私たちは、厚生労働省と打ち合わせを重ね、全実施団体からの事業報告を集約し、今年度の事業成果とする本報告書をまとめました。

本書では、今後支援センターが全国に普及していくことを見据え、それぞれの支援センターが対象となるエリアの現状と課題を踏まえてどのような事業を実施し、そしてどのような成果があったかを見渡せる構成としました。また、具体的な取り組み事例も併せて掲載しています。

ここ数年で、障害者の芸術文化活動を支援する取り組みやその担い手となる団体は、私たちが知り得ることができた情報だけを見ても、着実に増加していることを実感しています。そして、これからますます障害者の芸術文化活動に関するニーズが高まっていくことが予測されます。そのような状況のなか、本書が、地域における障害者の芸術文化活動支援の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の発行にご協力をいただいたすべての皆様へお礼を申し上げます。

2018 (平成30) 年3月
社会福祉法人 グロー (GLOW) ~生きる事が光になる~
社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

「障害者芸術文化活動普及支援事業」とは

障害者芸術文化活動普及支援事業は、さまざまな障害のある人たちが芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行うことができるように、地域における障害のある人たちの芸術文化活動を支援する体制を全国に展開し、障害のある人たちの自立と社会参加を促進することをねらいとしています。

2014（平成26）年度から3年間を通じて全国12カ所で行った「障害者の芸術文化活動支援モデル事業」の成果やノウハウをもとに、支援の対象を美術分野に加えて舞台芸術分野にも広げ、17（平成29）年度から実施を開始しています。

活動のエリアに応じて、「支援センター」（都道府県）、「広域センター」（ブロック）、「連携事務局」（全国）といった支援の拠点を設置し、17年度は、全国22の都道府県において23の団体が事業を実施しました（p5参照）。日本全国に支援の仕組みを整えると同時に、これらのセンターの連携・交流を進め、各都道府県での事業を県境を越えて広域でもつなげ、地域での振興を図りながら全国規模で推進とネットワークづくりを行っています。

また、毎年都道府県が持ち回りで開催する「全国障害者芸術・文化祭」（17年度は奈良県）や、同芸術・文化祭と連携する各自治体の「障害者芸術・文化祭サテライト開催事業」といった厚生労働省事業とも連携し、相乗的に障害者の芸術文化活動の振興を図っています。

主な事業内容

① 都道府県における「障害者芸術文化活動支援センター」（支援センター）

- ア 都道府県内における事業所などに対する相談支援
- イ 芸術文化活動を支援する人材の育成など
- ウ 関係者のネットワークづくり
- エ 参加型展示会などの開催
- オ 協力委員会の設置
- カ 調査・発掘、評価・発信
- キ 情報収集・発信

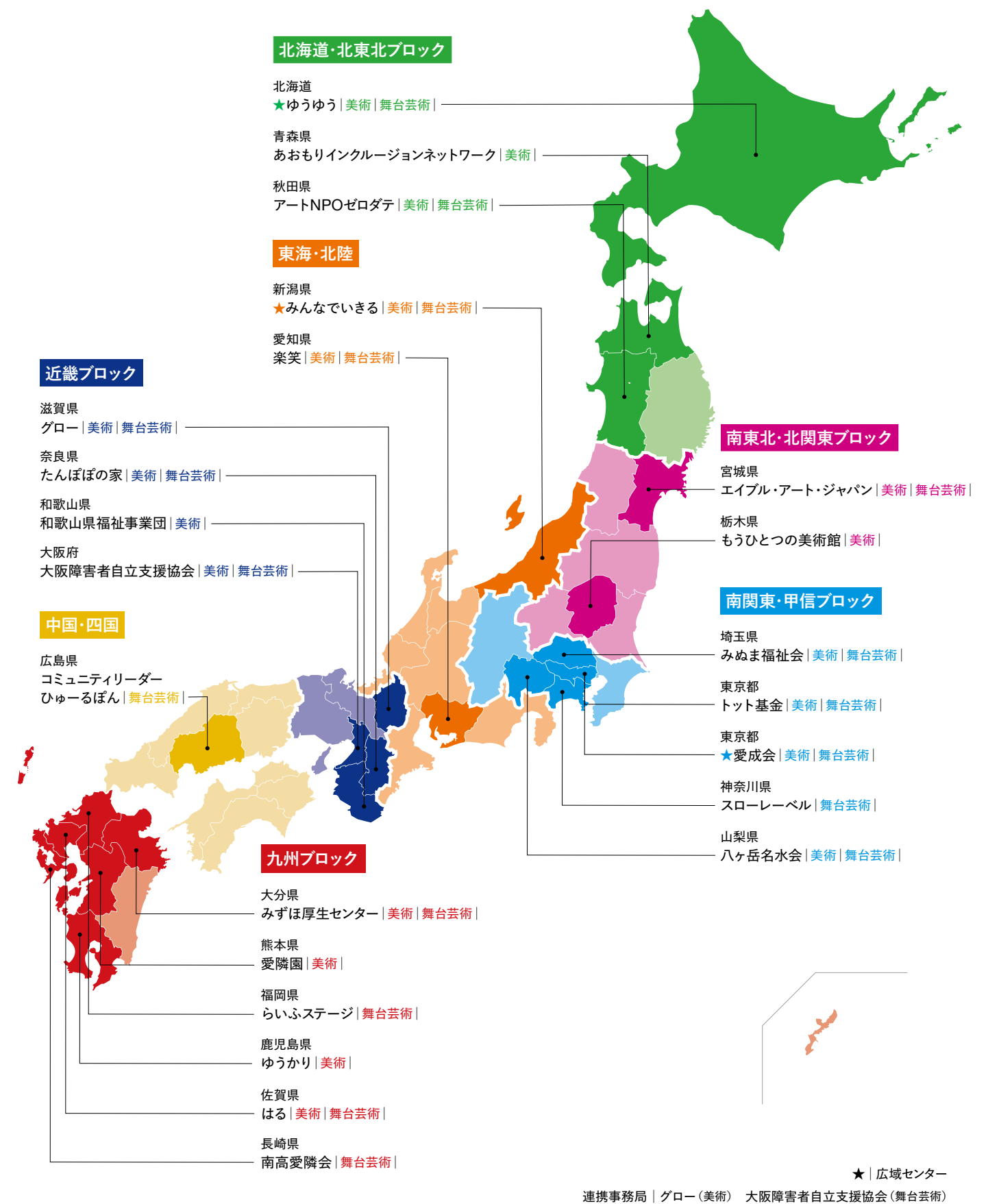
② ブロックにおける「障害者芸術文化活動広域支援センター」（広域センター）

- ア 実施都道府県の支援センターに対する相談支援、情報提供など
- イ 未実施都道府県の障害者やその家族、事業所などに対する相談支援
- ウ 芸術文化活動を支援する事業所などの育成、人材育成などのためのブロック研修の開催
- エ 展示会などの開催
- オ 情報収集・発信、ネットワーク体制の構築


③ 全国レベルにおける活動支援（連携事務局）

- ア 広域センターなどに対する支援
- イ 広域センター間の連絡調整、情報共有、意見交換などの実施
- ウ 展示会などの開催
- エ 全国の情報収集・発信、ネットワーク体制の構築
- オ 全国の成果報告のとりまとめ、公表など
- カ 障害者団体、芸術団体などとの連携

2017(平成29)年度実施都道府県および実施団体



● 広域センター不在の [南東北・北関東] ブロックについては、宮城県は [北海道・北東北]、栃木県は [南関東・甲信] のブロック事業に参加した（p48～51参照）。
 ● 広域センター不在の [近畿] [九州] ブロックについては、連携事務局がブロック業務のフォローを行い、[中国・四国] ブロックの広島県は [近畿] ブロックの事業に参加した（p60～61参照）。



支援センター 広域センターの 取り組み

2017(平成29)年度からスタートした「障害者芸術文化活動普及支援事業」では、各都道府県の支援拠点となる「障害者芸術文化活動支援センター」(支援センター)が20都府県で、絵画や陶芸などの美術分野、演劇や音楽、舞踊などの舞台芸術に関する支援事業を展開しました。ブロック内の支援を行う「障害者芸術文化活動広域支援センター」(広域センター)が3ブロックで、それぞれの地域の支援センターや事業の未実施の自治体の支援事業を行いました。ここではその取り組みを紹介します。

青森県



青森アール・ブリュットサポートセンター

〒037-0069 青森県五所川原市若葉3-4-10
TEL: 0173-26-7551 FAX: 0173-26-7551 MAIL: aasc.aorid@gmail.com URL: https://www.aasc.jp

実施団体

一般社団法人 あおもりインクルージョンネットワーク

実施団体概要

「障害をお持ちの方が地域に包括されていくまちづくり」を目的に、障害福祉事業を運営する複数の法人から役員が集まり、運営している法人です。「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」を受託し、五所川原市に「青森アール・ブリュットサポートセンター」を設置。アート担当スタッフと事業担当スタッフが青森県全域を対象に、障害者の芸術文化活動に関する相談の受付、研修会の開催、作品の調査・発掘、展覧会の開催などの業務を行っています。

都道府県の現状と課題

青森県は、ねぶた祭りに代表されるように古くから創作文化が根付いており、「青森県立美術館」や「十和田市現代美術館」「八戸ポータルミュージアムはっち」、弘前市「吉井酒造倉庫」、五所川原市「立佞武多の館」など、地域を挙げてさらなる芸術および創作文化の振興に力を入れてきました。一方で障害者の芸術文化活動

は、施設や病院の日中活動として実施されてきましたが、芸術という文脈から捉えられてきた実績は多くありません。また、芸術文化活動においては指導するという概念が根強く、本人の持っている世界観や感性の素晴らしさがまだ十分に引き出せていない点が課題と言えます。

今年度の取り組み概要とねらい

「青森アール・ブリュットサポートセンター」を拠点に、センターの機能を周知することと併せて、県内の現状を把握することから活動を始めました。いくつかの障害福祉事業所は本格的に障害者の芸術文化活動に取り組んでおり、大変クオリティーの高い作品も生み出していました。しかし多くの事業所では指導側の色合いの

強さが垣間見え、本人の良さが引き出されていない状況にありました。最初の段階として、まずはアール・ブリュットの魅力を広く伝えることと、どういった創作環境から作品が生まれているのかを知ってもらうことを当面の目標として設定しました。

今年度事業の成果

青森県のアール・ブリュット作品だけでは展覧会のクオリティーを高めることが難しく、作品の魅力を十分に周知することができずと予測されたため、北海道・北東北ブロックの広域センターとの連携により、県外の実績ある作家や作品を紹介いただき、青森県において合同展覧会を開催することにしました。2会場合わせて約800人の来場者があり、アンケート結果を見たところ、

大好評に終えることができました。またセミナーも全5会場での開催で100人を超える参加者があり、アール・ブリュットの魅力やその作品の生まれてくるプロセスについて周知することができました。さらには、県内各地で活動する福祉事業所や民間アトリエ間で交流が生まれ始めていることから、今後につながる動きになったと思われま

取り組み紹介

「北海道・北東北 アール・ブリュット展 青森展」

日程 | 2017年11月25日(土)・26日(日)、11月29日(水)～12月3日(日)
会場 | 楠美家住宅、青森県立美術館 コミュニティギャラリー

取り組みのねらい

青森県内の障害者芸術文化活動においては、本人が持っている良さを引き出すというよりは、指導する側の色合いが強い現状にあり、まずはアール・ブリュットの魅力そのものを広く知っていただく必要性がありまし

た。そのため、県外の実績ある作家や作品を紹介する機会をつくるのが有効と考え、広域センターとの連携のもと、「北海道・北東北 アール・ブリュット展 青森展」を開催しました。

実施内容

キュレーターとして協力委員の立木祥一郎氏を迎え、五所川原市文化財の古民家楠美家住宅と、青森県立美術館のコミュニティギャラリーにおいて開催しました。青森県の作品については、県内の福祉施設や特別支援学校を訪問・調査し、選定しました。運送に関しても新規事業であることから特に出品者との信頼関係が必要と思われたため、一軒一軒を訪問し、丁寧に梱包し

ながら収集することにしました。楠美家住宅では北海道・東北各地の作品約30点を展示。茅葺き屋根の古民家の風合いが見事にアール・ブリュット作品と調和しました。青森県立美術館では、北海道・東北各地の作品を約160点以上(細かなものを計上すると200点近く)展示する大規模な内容となり、ホワイトキューブで天井の高いギャラリーに迫力のある作品が数々並びました。



左 | 展示の作業スタッフ 右上 | 展覧会ポスター 右下 | 展示作業

成果

新聞やテレビなどにも取材していただいたことから、積雪の多い冬季期間にもかかわらず、両会場を合わせて約800人の来場者がありました。またアンケートでも「普通の美術展以上に圧倒されました」「一人ひとりの個性

が輝いて本当に素晴らしかった」などの声が聞かれ、両会場とも約8割の人が「素晴らしかった」と回答しています。多くの方にアール・ブリュットの魅力を伝え、興味を持ってもらえたものと考えています。

秋田県

ポコラート アキタ

〒017-0841 秋田県大館市字大町9

TEL: 050-3332-3819 FAX: 050-3332-3819 MAIL: info@zero-date.org URL: http://akita.zero-date.org/



実施団体

特定非営利活動法人 アートNPOゼロダテ

実施団体概要

「ゼロダテ(0/DATE)」とは、DATE(日付)を0(ゼロ)にリセットし、もう一度何かを始める、新しい大館を創造するという活動です。2006(平成18)年に、大館市出身のクリエイターが自発的に立ち上げました。近隣の温泉地や周辺地域で美術展や音楽フェスを開催し、アートで街と街をつなぐ活動を行っています。近年では、県内の特別支援学校を含む学校や福祉施設に、さまざまなジャンルのクリエイターを講師として派遣してワークショップや研修会を実施するなど、活動は多岐にわたります。こうしたアーティストや市民などとの協働による創造的な活動や国際交流、文化芸術活動拠点の形成による地域再生と地域に根付いた市民文化芸術活動の促進を目的としています。

都道府県の現状と課題

芸術活動に取り組む福祉施設が少なく、障がいのある人の個性ある表現行為を受け止められる支援者や環境が圧倒的に不足しています。県内の福祉施設を対象に、16(平成28)年と17(平成29)年に実施したアンケートでも、障がいのある人の芸術活動の支援において必要性を感じる課題として「芸術活動を支援できる人材(美術経験者)の確保」が2年続けてもっと

も多い回答になりました。芸術活動に関心の高い施設でも「専門的知識や技術の不足」「人手・時間・場所の確保」「収益化への壁」など課題が多く、障がいのある人への支援とともに、各施設内での通常業務と並行しながら芸術活動をサポートできる人材の確保や育成などの“支援者に向けた支援”が求められています。

今年度の取り組み概要とねらい

障がいのある人、高齢者、若者、子どもと、誰もが社会とかかわり合える新しいインクルーシブな「場」をつくることを目標に、美術展と多様な体験プログラムを展開する「ゼロダテ少年芸術学校2017」を開催。ゼロダテアートセンター(大館市)では、所属アーティストによる、障がいのある人やその支援者を対象とした創作

ワークショップを実施したほか、昨年度に引き続き市内の一般家庭も展示会場とする展覧会「LIFE+ART」を開催。参加者や鑑賞者が、より生活に身近なところで障がいのあるアーティストの作品に触れられるような工夫をしました。

今年度事業の成果

県内の「ゼロダテ少年芸術学校2017」「LIFE+ART」をはじめ、奈良県、青森県、北海道の「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」の実施団体と連携して、「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」(奈良県)、「北海道・北東北 アール・ブリュット展」(北海道・青森県)と各地の展覧会に、県内の障がいのあるアーティストの作品を出展。16年度から継続して取り組ん

でいる県内の障がいのあるアーティストの調査・発掘で得られた情報を発信する機会をつくることができました。また、ゼロダテアートセンターで実施したアーティストによる創作ワークショップでは、障がいのある人と一緒に支援者にも参加してもらったことで、よりよい支援について障がいのある人、支援者、アーティストが一緒に話し合い、考えていく「場」となりました。

取り組み紹介

「ゼロダテ少年芸術学校2017」

日程 | 2017年9月16日(土) ~ 18日(月・祝) 会場 | 大館市郊外の工場跡地をメイン会場に市内3カ所で開催

取り組みのねらい

障がいのある人と支援者を対象に、アーティストがワークショップや研修会を実施して、交流しながら創作活動を行う「場」を、これまでに多数つくってきました。17年度は、障がいのある人と支援者だけでなく、子どもや

高齢者、若者など誰もが少年の心を持ってワクワク楽しみながら社会とかかわり合える新しいインクルーシブな「場」をつくることをめざしました。

実施内容

「ゼロダテ少年芸術学校2017」は美術展と多様な体験プログラムで構成したイベントになりました。アーティストや音楽家、木工職人、バリスタなど、さまざまな専門家による文化的で創造性に富んだ13種のワークショップのほか、ダンスパフォーマンスや音楽ライブ、映画上映などを実施。多様な層の市民に気軽に参加して楽し

んでもらうために、愛犬家のためのドッグランやラジコンカー用のスペースも設置するなど工夫を施しました。市民が自由に参加できるオープンなメイン会場では、美術展の公開講評会や障がいのある人の作品に関する研修会を行い、芸術文化活動や支援について話し合いました。



左 | メイン会場 右上 | 公開講評会 右下 | 音楽家によるワークショップ

成果

専門家と障がいのある作家、その支援者を交えて、それぞれの作品・作家の背景などもふまえて実施した公開講評会は大変有意義なものとなりました。3日間にわたって実施した美術展や各プログラムを通して、障がい

の有無を飛び越え、参加した誰もが体験を共有し、交流を楽しみながらかかわり合える「場」をつくることができました。

宮城県

SOUP (障害者芸術活動支援センター@宮城)

〒983-0851 宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地 みやぎNPOプラザ内 No.16(2018年8月まで)
TEL: 070-5328-4208 FAX: 022-774-1576 MAIL: soup@ableart.org URL: http://soup.ableart.org/

実施団体

特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

実施団体概要

1995(平成7)年から「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」を提唱し、アートや人間の可能性を再発見する活動を進めています。企業、行政、市民と協働しながら、作品や表現のアウトプット、環境を支えるための人材育成、障害のある人たちとともに鑑賞、対話、創作、国際交流、災害復興支援活動などを行い、障害者アートの社会的意義を問う事業を展開。2011(平成23)年には東北に事務局を設置し、14(平成26)年には「まぜると世界が変わる」をコンセプトに「SOUP(障害者芸術活動支援センター@宮城)」を立ち上げました。「障害(バリア)から価値(バリュー)へ。障害、性別、世代、地域…違いを受け入れられる文化のある社会こそが豊かなまち」と考え、障害のある人たちの芸術文化活動を支援しています。

都道府県の現状と課題

人口約232万人が暮らす東北の中心地であり、美術や音楽、演劇など、さまざまな芸術文化活動が精力的に行われていますが、障害者の芸術文化活動の充実度とは差があります。14年から「SOUP(障害者芸術活動支援センター@宮城)」が窓口となり、相談支援事業、人材育成事業、参加型展示会の巡回により、広がりや深まりのあるネットワークを構築。地域に眠る作品や

作家を発掘して活躍の場へと導くことをめざして取り組んできたところ、活躍の場を広げる県内の作家が増え、参加型展示会を契機にアートNPOが誕生して障害者アートの常設ギャラリーが新設されたほか、作品の二次利用の実績も増えています。しかし、県全域を見渡せば芸術文化活動の機会は乏しく、さらに舞台芸術分野は事例がまだ少ないのが現状です。

今年度の取り組み概要とねらい

舞台芸術分野を促進するため、次の5つの事業に取り組めました。①「相談支援事業」=障害のある人やその家族、支援者に対してアドバイスや関係機関を紹介できるように相談窓口を設置。②「人材育成事業」=身体表現ファシリテーター養成ワークショップ、障害のある作家や舞台芸術の著作権保護に関する研修会を実施。③「参加型展示会・公演」=身体表現や舞台

美術のワークショップを通して参加型の舞台公演を実現。④「鑑賞支援事業」=芸術文化活動の情報を不自由なく得る、参加する、表現する、鑑賞することができる仕組みを整えるアプローチを展開。⑤「調査・発掘、評価・発信事業」=アンケート調査を実施して、活動者を訪問ヒアリングし、多様な視点で障害のある人の芸術文化活動を取り巻く現状を丁寧に観察。

今年度事業の成果

上記①年間288件の相談があり、ケースの多様化、仙台市以外からの相談の増加がみられました。②舞台芸術分野を柱に、ファシリテーター養成やケアする人の育成などの研修を実施しました。著作権研修では、舞台芸術における権利への理解を深めました。③美術分野では計7回の連携展示があり、のべ3249人の来場者を迎えました(舞台芸術分野についてはp13で詳細を記載)。④宮城県

美術館のリニューアルに伴い、アクセシビリティや鑑賞にかかわる情報提供を行いました。⑤16(平成28)年度から継続するウェブ公開型のアンケート調査から26人の作品情報が集まり、そのなかから5人の作家による100点の作品をウェブサイトに公開しました。過去3年の「障害者の芸術活動支援モデル事業」から発展して県内外の福祉団体や芸術文化関係者との連携が始まっています。



取り組み紹介

SOUP STAGE「ミクストジャーニー」(構成・演出 | 磯島未来)

日程 | ワークショップ: 2017年9月19日(火)~2018年2月4日(日) 公演: 2018年2月17日(土)・18日(日)
会場 | ワークショップ: せんだい演劇工房10-BOX ほか 公演: 青葉の風テラス

取り組みのねらい

身体表現をしたい人たちが共同で一つの作品を創作して発表します。出演者募集のために、県内の北部・中部・南部の3地域でワークショップを実施。広域での関心層の掘り起こしを図り、多様な地域で暮らす人たちが

さまざまな方法で参加できる表現のあり方を探りました。また、本事業をきっかけに、参加者同士の継続的な交流が生まれ、県内に障害のある人と舞台芸術に関するコミュニティが生まれることもめざしています。

実施内容

9月から身体表現のプログラム「舞台をつくるSOUP STAGE」をスタート。それぞれの身体を知る「身体で表現してみよう!」ワークショップを県内3地域で各3回、ものづくりで舞台に参加する「舞台美術をつくろう!」ワークショップを中部地域で2回実施し、そこで出会った人たちとともに舞台を創作しました。小学生から50

代までの出演者が、南部から4人、中部から8人集まり、公演本番に向けて17(平成29)年11月末から11回のクリエイションを実施。舞台美術には障害のある作家や市民5人が参加しました。公演には、のべ140人の観客が集まりました。広報物には年間を通して障害のある作家のイラストを採用しました。



左 | チラシ 右 | 通し稽古の様子



成果

県内を巡回した普及活動を通して、各地での舞台芸術分野へのニーズを再確認しました。その後、SOUPがこれまでの活動で積み上げてきたネットワーク団体と新しい地域の団体の協力のもと、出演者と制作チームを結成。障害のある人の魅力や特性を活かした表現を引き出すために、身体表現、美術、音楽、福祉(ケア)が

密接に影響し合うクリエイションを行いました。優れたクリエイションや作品を輩出するという目的を掲げ、有料公演としましたが、定員20パーセント増の観客を迎えることができ、まだまだ舞台芸術の事例が少ない東北での新しい挑戦となりました。

栃木県

美術

とちぎアートサポートセンターTAM

〒324-0618 栃木県那須郡那珂川町小口1181-2

TEL: 080-3001-8088 FAX: 0287-92-8088 MAIL: tam@nactv.ne.jp URL: http://tam-mob.org/

実施団体

認定特定非営利活動法人 もうひとつの美術館

実施団体概要

「みんながアーティスト、すべてはアート」をコンセプトに、年齢、国籍、障害の有無、専門家であるかないかを超えて、アートを核に地域・場所や領域をつなぐ活動を行っています。障害のある人たちの芸術文化活動に関する課題や悩み、疑問などを共有して、支えていくために「とちぎアートサポートセンターTAM」を館内に開設しました。研修会や展覧会などを通じて、実際に見聞し、体験し、学ぶことで支援にかかわる人たちの視野を広げ、つながりをつくり、社会へと発信していくことを目的としています。

都道府県の現状と課題

障害者の芸術を発信する場として「もうひとつの美術館」を2001(平成13)年に開館し、県内外を問わず、障害者が手がけた優れた作品を紹介してきました。県内には、長年創作活動を行っている福祉事業所、これから創作活動をしていきたいと考えている福祉事業所や個人がいるものの、創作を行う環境はなかなか整備できていないのが現状です。福祉事業所にお

いては、ほかの作業の合間での活動であることが多く、所内の創作活動に対する理解と関心の差、人手不足などがあり、創作活動を支援する職員が孤軍奮闘しているという様子が見受けられます。個人では、つくった作品をどのように保存・発信し、継続していけばいいのかわからず、迷いながら活動をしている方もいます。

今年度の取り組み概要とねらい

県内648カ所へのアンケート調査などにより、障害者の創作活動における現状の課題を把握しながら、障害者の芸術文化活動の支援者となる人材育成を目的とした研修会を全5回実施。最終的な実践の機会として参加型展覧会「TAM|タム|展」を開催しました。創作活動の支援者の意見や情報を共有して、つながりをつ

くることで良い活動につなげていく場「TAM会議」を立ち上げ、問題解決に向けてともに考え、支援していくための電話相談窓口の設置、ウェブサイトでの情報発信などに取り組みました。これらを通して、障害者の創作活動、表現行為に関する理解を深め、その環境を整備し、社会へと発信し広げていくことをめざしました。

今年度事業の成果

全5回の研修会や参加型展覧会では、まったくの手探り状態の方から長年創作活動の支援にかかわっている方まで、さまざまな環境のなかで創作活動を支援している、または支援しようとしている人たちが集まりました。お互いの話を聞き、活動している姿を見て、刺激し合い、感化されたようです。なかでも参加型展覧会では、福祉事業所の職員や利用者が自分たちの作品

が展示されている様子を観るために来場。作家本人にとってはモチベーションの向上につながり、福祉事業所においては今まで興味や関心が薄かった職員も創作活動に前向きになったと聞きます。この活動によって、創作活動に対する福祉事業所側の意識を良い方向へと導き、理解を深めるきっかけになったと考えています。

取り組み紹介

「TAM|タム|展」

日程 | 2018年2月23日(金)～25日(日) 会場 | 栃木県総合文化センター

取り組みのねらい

人材育成を目的として、障害のある人たちによる創作・表現活動を支援している方や興味のある方を対象に、「つくる体験のワークショップ」「施設見学」「評価について学ぶ」「著作権について学ぶ」「作品管理のための撮影」という全5回の研修会を実施。その最終的な実践

の機会として参加型展覧会「TAM|タム|展」を開催し、実施過程を体験することにより、創作活動・表現行為に関する理解を深め、学びながら社会へ情報発信をし、創作活動を広げていくことを目的としました。

実施内容

3日間にわたって開催する「TAM|タム|展」に向けて、上記研修会の参加者が中心となり作品の額装やレイアウト

会議、搬入、設営、搬出など、展覧会に必要な一連の流れを学習し、開催中も受付や監視として参加しました。



左 | チラシ 右上 | レイアウト会議の様子 右下 | 展示の様子



成果

3日間の来場者数は678人。出展者アンケートでは「多くの人に観て知ってもらえて有意義だった」「情報の共有やつながりができ、今後に活かせるようになった」「絵に対する考えが変わった」「今後の活動のイメージが広がった」「展示された自分の作品やほかの方の作品を観たことで、作家本人の創作意欲の向上につながった」といった変化の声がありました。支援者やご家

族が研修会への参加を経て、展覧会を実施し、来場者の声を直接聞くことにより、作品のあり方、著作権のあり方、芸術文化活動を社会により周知させることの必要性など、今後の課題の発見もあったようです。今後の活動をさらに深め、質の向上や発信につながることを期待されます。

埼玉県

アートセンター集

〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445
TEL: 048-290-7355 FAX: 048-290-7356 MAIL: kobo-syu@marble.ocn.ne.jp URL: http://artcenter-syu.com/

実施団体

社会福祉法人 みぬま福祉会

実施団体概要

1984（昭和59）年発足。現在は22の事業を展開し、300人以上の障害のある人が利用しています。94（平成6）年ごろ、授産活動に合わない人たちがいたことをきっかけに、彼らの表現活動が仕事として成立するような取り組みを始めました。2002（平成14）年には「地域に開かれた施設づくり」をコンセプトに、ギャラリーを併設する「工房集」を開設。障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、そのなかから生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、かかわり、新たな可能性が生まれてきています。16（平成28）年より障害のある人、その支援者の課題解決や情報交換、ネットワークの場づくりとして「アートセンター集」を開設。表現することは生きることそのもの、表現活動を通じて人と人とを豊かにつないでいきます。

都道府県の現状と課題

県主催の「埼玉県障害者アートフェスティバル」が、美術、舞台芸術、音楽の3本柱で09（平成21）年から開催されてきました。さまざまな催しの一つとして、県立近代美術館を会場とした「埼玉県障害者アート企画展」がスタート。開催にあたって「障害者の芸術活動を支援する人材の育成」を主眼に、福祉施設職員や学生が学びながら展覧会の企画・運営などを行い

ました。そのつながりをもとに16年に「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O（タマップブラマイゼロ）」を立ち上げ、さまざまな専門家と協働で展覧会の企画・運営や研修の実施、情報交換や悩み相談などを行ってきました。課題としては、さらにすそ野を広げていくための継続、情報発信です。

今年度の取り組み概要とねらい

当法人は20年以上前から表現活動を仕事として位置づけてきた経験と実績があります。障害のある人の表現活動を普及していく上では、福祉施設職員を中心とした人材育成が大切だと考えています。事業の中心である「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O」は、参加型展覧会の企画・運営だけが目的ではなく、毎月の定例会で情報共有をしながら人材育成につ

なげるように意識しています。研修として実施した「障害者芸術支援シンポジウム」「権利保護や商品化に関するセミナー」「アトリエ見学ツアー」「インターンシップ研修」「商品化研修」についても、表現活動や商品化に関するノウハウだけでなく、“何のため”“誰のため”の表現活動なのか、商品化なのかを一緒に考えられるように企画しました。

今年度事業の成果

相談件数は460件（2018年3月10日現在）。相談受付を継続してきたなかで、展覧会につながった作家が生まれるなど、福祉的な支援が必要なケースも多く、相談支援員の重要性も高まっています。大学から「展覧会を企画したい」という相談や講演依頼などもあり、学生に向けて活動の発信ができたことも特徴です。また人材育成研修では、障害のある人の芸術文化活動の根幹と

なる考え方や捉え方を共有できるように意識し、参加者からも「人間の生きる意味や哲学的なところまで深まり、考えさせられました」などの感想がありました。さらに4つの参加型展覧会では、人材育成を目的とするとともに、出展作家にスポットが当たるイベントの企画を実施。それらを通して、社会への発信と、作家本人の自信や意欲向上にもつながりました。



取り組み紹介

「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O」

日程 | 月1回開催 会場 | 工房集

取り組みのねらい

16年度に11施設で発足した「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O」。今年度も新たな施設が加わり、全25施設の参加により開催しました。毎月の定例会を実施し、4つの連動する展覧会を企画・運営したり、日々の悩み相談や情報共有をしています。そのな

かで、参加者それぞれの日々の実践につながるよう、また各施設が主体的に障害のある人の芸術活動について考えられるよう、福祉施設職員を中心とした人材育成を主眼として取り組んでいます。

実施内容

毎月実施する定例会において、展覧会などの企画・運営についての協議だけでなく、日々の活動についての相談や情報、また作家や施設の状況などを共有するなかで、障害のある人の芸術活動の考え方や捉え方について、参加者それぞれが振り返って考えられる時間になるようにしました。今年度は初回の定例会で、県の取り組みに長年かかわっている中津川浩章氏（美術家）

の講演を含めた学習会を開き、「今の日本の障害者アートの動き」「埼玉県が推進してきたこと」「自分たちのやっていることの確認」などについて共有できました。展覧会のための作品選考会では、美術専門家とネットワークメンバー、協力委員（弁護士、県職員など）と一緒に、お互いが作品について語り合う貴重な時間を大事にしました。



左上 | 定例会 左下 | アートディレクターによる学習会 右上 | ネットワークロゴ 右 | 取り組みイメージ

成果

定例会を毎月実施することができ、欠席の施設には議事録を送り、定例会では伝えきれないことを一斉メールで共有することで、日々の実践、活動の目的、社会への発信方法などについて意識を高めながら活動に取り

組んできました。それにより、参加者が主体的に考え、各々の施設に持ち帰ることで、人材育成、アート活動を行う作家の増加、展覧会出展者の拡大など、県内の障害のある人の芸術文化活動の普及につながっています。

東京都

アーツサポ東京

〒141-0033 東京都品川区西品川2-2-16
TEL: 03-3779-0233 FAX: 03-3779-0206 MAIL: info@artssup-totto.org URL: http://artssup-totto.org

実施団体

社会福祉法人 トット基金

実施団体概要

理事長・黒柳徹子著「窓ぎわのトットちゃん」の著作権を受領して、1982（昭和57）年に設立した社会福祉法人です。品川区の「トット文化館」を拠点に、聴覚障害者の自立支援のための就労継続支援B型施設と並行し、聴覚障害者による芸術創造の場として「日本ろう者劇団」を運営しています。同劇団は、手話狂言、視覚演劇、ムーブメントシアターなど手話による演劇を創作し、国内各地のみならず海外でも公演、ワークショップなどを展開して、ろう者による演劇活動を牽引しています。さらにトット文化館の手話教室で劇団員が指導したり、特別支援学校やろう学校で演劇を指導したりと、地域とのつながりの拡充および社会貢献にも努めています。

都道府県の現状と課題

知的障害者を中心とした美術分野では、「障害者の芸術活動支援モデル事業」から継続されてきた愛成会による支援も奏功して、ネットワークが拡充し、順調に進展しています。一方で舞台芸術分野も、個々の団体の個性豊かな活動が着実に進み、他地方に比べれば活発な創作活動が行われています。しかし、福祉施設など障害者が身近で表現活動に参加できる環境の整

備や関係者・組織間のネットワーク構築など、美術分野と同等の展開をめざすには、さらなる重点的な取り組みが必要です。障害者が映画、絵画、演劇といった分野の芸術が鑑賞できる環境づくりがNPO法人などによって進められていますが、表現活動への参加の動機付けとしても重要な役割を果たしていることから、環境整備の一層の進展が期待されています。

今年度の取り組み概要とねらい

日本ろう者劇団が蓄積してきたスキルやノウハウ、ネットワークを土台として、聴覚障害の方による演劇を活動の中核としつつも、さまざまな障害種別やほかの芸術ジャンルにも広げていく方針です。日本ろう者劇団および業務提携先であるNPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークのろう者が中心となって活動を進めたこと、研修会や公演、トークイベントなどすべて

の活動に手話通訳そのほかの情報保障を施したことが大きな特色と言えます。都内には、活動の対象となる個人や団体が特に多く、関係する組織・事業も広範におよぶので、まずは現状把握とノウハウ蓄積、さらにネットワーク構築をめざして各種研修会の実施、参加型展示会、公演の企画、実施、ウェブサイト運営などに取り組みました。

今年度事業の成果

各支援活動の企画・運営の過程を通してノウハウを学び、現場から手応えを得て、次なる課題を抽出することができました。創設以来の法人のモットーである「聴こえる人と聴こえない人が一緒に楽しめる」活動をめざした結果、研修会や展示、講演会などでは、参加した障害者（聴覚以外の障害種別を含む）と健常者、双方の心理的バリアが消え、互いに打ち解け合って、会場に一

体感が生まれました。聴覚障害者のための手話通訳、字幕、UDトーク、視覚障害者のための音声ガイドや舞台説明、展示ガイドツアーなど、各種の情報保障が施された展示や講演会を多くの来場者に体験していただくこともできました。聴こえない世界で長年、演劇活動を続けてきたプロのろうの俳優たちがイニシアチブを取るからこそ実現できたことです。



取り組み紹介

「トットARTSフェス2018」

日程 | 2018年2月17日(土)・18日(日) 会場 | トット文化館

取り組みのねらい

「聴こえる人も聴こえない人も、見える人も見えない人も、みな一緒に楽しむ」を目的に開催。地域の人々、聴覚や視覚に障害のある人、その友人や家族、アート愛好

者、そして手話の学習者など、遠方からの人も含めて、160人以上の来場者を迎えました。

実施内容

美術展「光と陰」は、ろう者と地域の美術家17人の作品展。ダイナミックな大型作品、微細な静物画、幻想的な抽象画など、作家の個性が表れた多彩な作品が展覧されました。音のない「静」の世界に生きる人々の研ぎ澄まされた感性と秘められたエネルギーの熱さを感じ取っていただけたと思います。特別展示のろうの写真家・井上孝治氏による作品、株式会社バソナハートフル「アート村」の絵画作品も、展覧会を一層彩り豊かなものとして

くれました。ステージ・プログラムは、全盲の役者・美月めぐみ氏を中心とする「演劇結社ばっかりばかり」による、障害のある人が街で遭遇しがちな「あるあるネタ」のオムニバス・コント、日本ろう者劇団による「ムーブメントシアター」と手話ワークショップなどを実施。2日目の締めくくりには、ミュージカル・グループ「ホット・ジェネレーション」代表・鳥居メイ子氏を交えて、トーク・セッション「思い思いにARTSを楽しもう!」を行いました。

トット ARTS フェス 2018
2018.2.17(土) 12:00~17:00 18(日) 10:00~15:00 入場無料

会場 トット文化館
〒141-0033 品川区西品川2-2-16 JR 大塚駅南口より徒歩10分

事前予約 不要 入退場 自由

軽食販売あり

美術展「光と陰」井上孝治作品特別展示あり
個展や公募展で活躍する画家、プロをめざす若手アーティスト、長年こつこつと描き続けてきたろう者、それぞれ作品に隠された多様な芸術性が光り輝きます。

ステージ・プログラム

2月17日(土)
13:00~13:30 演劇結社ばっかりばかりミニ公演
「悪い人じゃないんだけど…」
14:00~14:30 日本ろう者劇団「ムーブメントシアター」
15:30~16:00 手話ワークショップ(講師:井崎哲也)

2月18日(日)
11:00~11:30 手話ワークショップ(講師:井崎哲也)
13:00~13:30 演劇結社ばっかりばかりミニ公演
「悪い人じゃないんだけど…」
14:00~15:00 トーク・セッション「思い思いにARTSを楽しもう!」
出演者:ホット・ジェネレーション 代表 鳥居メイ子
演劇結社ばっかりばかり 女優 美月めぐみ
日本ろう者劇団 俳優 廣川麻子



左 | チラシ 右上 | 美術展「光と陰」 右下 | ムーブメントシアター

成果

種類や内容はさまざまでしたが、障害のある人となない人が一緒に作品をつくるプロセスの醍醐味など、共有される要素は多く、ゴールとして「めざす社会は同じだ」と確かめ合うことができました。視覚障害のある人には美術展ガイドツアーとステージ・プログラムの音声ガイ

ド、聴覚障害のある人には手話通訳と字幕などを用意していたこともあり、障害のない人にステージや展覧会での情報保障について具体的に知っていただく機会にもなりました。

神奈川県



特定非営利活動法人 スローレーベル

〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通1丁目 象の鼻テラス
TEL: 070-5453-7154 FAX: 045-661-0603 MAIL: mail@slowlabel.info URL: http://www.slowlabel.info

実施団体

特定非営利活動法人 スローレーベル

実施団体概要

ものづくりやアート、パフォーマンスなど多様な芸術分野を横断的に扱いながら、障害のある人とない人の出会いの場と協働の機会を創出し、相互理解を促すことをめざす団体です。2015（平成27）年に「SLOW MOVEMENT」というプロジェクトを立ち上げ、パフォーマンス作品を制作しながら、障害のある人が舞台芸術活動にアクセスするための環境整備やサポートする人材の育成に取り組んできました。今年度からはこれまでの作品制作、アクセシビリティ整備、人材育成のノウハウを活かし、県内のさまざまな団体や施設などと連携しながら、支援センターとして相談支援や人材育成のための研修プログラムなどを実施しています。

都道府県の現状と課題

県内には障害とアートの先駆的な取り組みを行う施設や団体が多数存在します。舞台芸術分野でも「神奈川芸術劇場」や「STスポット横浜」「横浜能楽堂」といった劇場が、鑑賞支援やワークショップ、調査研究などを積極的に実施。また30年以上続くろう者の人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」も同県を拠点としています。当団体が共催者として14（平成26）年から実施

している芸術祭「ヨコハマ・パタリエンナーレ」も国内外で注目を集めています。一方で、すそ野を広げる取り組みは始まったばかりです。全国第2位の人口を有し、政令指定都市を3市含む神奈川県で全域にわたって活動の輪を広げていくためには地道な活動の継続が必要です。既存の先進的な団体や施設と連携しながら、普及活動を進めていくことが求められています。

今年度の取り組み概要とねらい

当団体が「平成27年度障害者の芸術活動支援モデル事業」を通して得た県内の施設や団体とのつながりを基礎とし、さらに県域での活動を広げていくことをめざし、研修や相談支援を実施しました。より多くの障害者が芸術文化活動に取り組むきっかけをつくるには、あらゆる障害者が参加し、楽しめるような仕組みが必要と考え、支援人材の育成の要素も複合的に盛り込んだ

「マーチングプログラム」を実験的に展開しました。今年度からスタートした「障害者芸術文化活動普及支援事業」から舞台芸術分野が対象になったということもあり、プログラム開発や県域での活動については、県内で先進的な活動をしている団体に協力委員会などを通じて知見を共有してもらいながら進めました。

今年度事業の成果

障害者の舞台芸術活動を広めていくためにどのようにアプローチしていくべきか、県内の団体や施設にヒアリングを重ねることで少しずつ見えてきました。相談窓口では当団体が舞台芸術の作品制作や発表などを行っていることも関係して、障害当事者から「舞台芸術に取り組んでみたいが場所がない」「どうすれば参加できるのか」といった相談が多数寄せられ、個人のニーズを

非常に感じることができました。マーチングプログラムでは福祉施設の支援員以外のアーティストやセミプロの人々が支援者になり得る可能性を感じました。もっとも課題が大きかった県内の福祉施設へのアプローチの仕方も、本プログラムを通じてつながった施設からフィードバックをもらい、意見交換する場ができたことは大きな成果です。

取り組み紹介

「マーチングプログラム」

日程 | 指導者ワークショップ：2017年9月17日(日) / 市民マーチングバンド「パタリマーチ」：2017年10月8日(日)・9日(月・祝)
会場 | 障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール、象の鼻パーク

取り組みのねらい

より多くの障害者が芸術活動に親しむ環境を整備するには、「あらゆる障害者が参加し、楽しめるような舞台芸術の仕組み(=きっかけづくり)」と「舞台芸術に関して専門性を持つ市民が活動をサポートする人材として障

害者の芸術活動に参加する仕組み(=人材育成)」が不可欠と考え、それらを複合的に盛り込んだプログラムを開発し、実施しました。

実施内容

誰もが自分のペースで楽しく参加できるマーチングパフォーマンスのための指導者ワークショップを開催。全国各地で音楽の楽しさを伝えるマーチングバンドのワークショップやパレードを開催しているミュージシャンの坂口修一郎氏が音楽経験のある市民(セミプロ)に指導

法を伝授。その指導を受けた市民が県内の福祉施設でワークショップを実施。県内の福祉施設の方たちと「ヨコハマ・パタリエンナーレ2017」でマーチングパフォーマンスを発表しました。



左 | パタリエンナーレでの発表 右上 | 指導者ワークショップ 右下 | 福祉施設でのワークショップ

成果

福祉施設での出張ワークショップをきっかけに、これまで舞台芸術を体験する機会がなかった障害者が音楽やマーチングを楽しみ、パタリエンナーレでの発表を経て、達成感や自信を得ました。当初発表への参加を予定していなかった施設も、ワークショップを体験し、マーチングパフォーマンスの楽しさに目覚め、参加してくれるという出来事もありました。ファシリテーターとして研修を受け、施設でワークショップを行ったセミプロの

ミュージシャンたちにとっても、障害者との活動は刺激的で、活動の幅を広げるきっかけとなったようです。一連のプロセスを見た評価委員からは、指導者育成から施設でのワークショップ、発表の流れはよくできていると高い評価をいただいた一方、指導者研修の内容や回数などをもう少し丁寧に行うと、よりよいプログラムになるとフィードバックをいただきました。

山梨県



山梨芸術活動支援ネットワーク・センター (YAN)

〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条1237-3(社会福祉法人八ヶ岳名水会 企画事業部内)
TEL: 0551-32-0035 FAX: 0551-32-6351 MAIL: yan@y-meisui.or.jp URL: http://www.y-meisui.or.jp/yan/

実施団体

社会福祉法人 八ヶ岳名水会

実施団体概要

理念は「共に暮らす地域の創造と実現(ノーマライゼーション)」。北杜市や韮崎市を中心に、知的、精神および身体に障害のある方々の地域生活を支援するため、入所施設やグループホーム、通所施設の運営、居宅介護、相談支援、就業支援などさまざまな事業を行っています。また廃校を利用し、地域の活性化を目的とした公益事業「日野春學舎構想」も展開しています。この構想は農業や芸術文化活動、また社会のなかで生きづらさを抱えた人たちと社会との架け橋づくりを軸とし、地域を広域的に再活性化することを目標としています。そのなかで芸術文化活動は、楽しみながら参加でき、自己肯定感を醸成するツールとして重要な位置を占めています。

都道府県の現状と課題

県内における障害者の芸術文化活動は、長年地道に活動を支援してきた団体があるほか、継続的に開催されているイベントもあるものの、県全体としては地域や団体によって活動に対する温度差があります。また、地理的に国中と郡内の2地域にネットワークが分かれがちであるという課題があります。障害を抱えた方々

が安心して芸術文化活動を行い、作品を発表するための場所や機会が提供されるように、県全体での相談支援と情報発信、施設や地域を越えた交流を実現する全体をつなぐネットワークづくりが重要です。芸術文化活動や作家・作品の権利保護などについて専門知識を有した支援者の育成も課題となっています。

今年度の取り組み概要とねらい

「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」により、県内のアート活動の現状把握、研修会や企画展などが実施され、新たなネットワーク構築による成果が見られるようになってきました。今年度は、それらの実績を踏まえたさらなる活動の底上げと展開をねらいとし、郡内地域との連携を図る巡回展と、舞台芸術分野で37回の開催実績のある「山の都ふれあいコン

サート」への協力、「第4回山梨県障害者芸術・文化祭」に合わせて長崎県より瑞宝太鼓を招いての演奏会を計画しました。さらに、それらの活動によって生まれたネットワークを活かし、新たに調査・発掘した作家の個性を集約し、広く発信するための場として県立美術館での合同企画展を開催しました。

今年度事業の成果

県内の弁護士や精神科医を講師に招き、実践的な研修会を行いました。今年度、フランスのナント市で開催された「KOMOREBI展」の集約作業が当法人の日野春學舎で行われたことから、その成果を発表する「アール・ブリュット in 山梨」を実施しました。また、「KOMOREBI展」に出品した作家の作品と、県内で活躍している作家の作品を併せて展示する巡回展も企画し、地域の枠を越えたアート活動の交流を実現させました。また、「第4回山梨県障害者芸術・文化祭」だけで

なく、地元の特別支援学校や郡内地域でも長崎県の瑞宝太鼓を招へいし演奏会を行ったことで、年齢や地域にかかわらず舞台芸術活動のすそ野を広げる一助となりました。「第37回山の都ふれあいコンサート」では資金面・広報面・作品展示で協力し、昨年度と比較して1.5倍の集客を実現しました。2018(平成30)年1月には27人(県内22人)の作家が参加した合同企画展を実施し、県内作家にとって目標となる発表の場の実現とネットワークの強化を図ることができました。

取り組み紹介

「第2回山梨アール・ブリュット合同企画展～親密なるまなざし～」

日程 | 2018年1月23日(火)～28日(日) 会場 | 山梨県立美術館 県民ギャラリー

取り組みのねらい

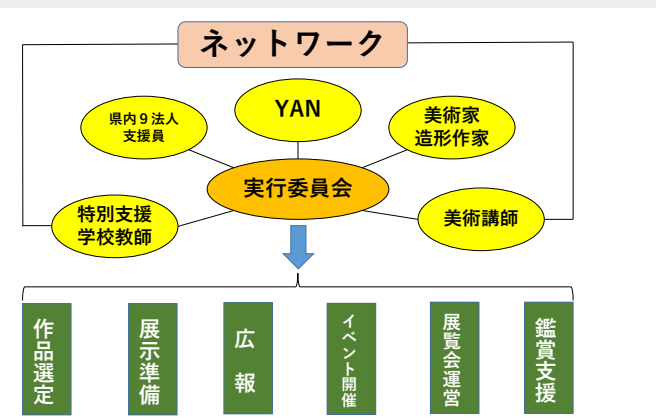
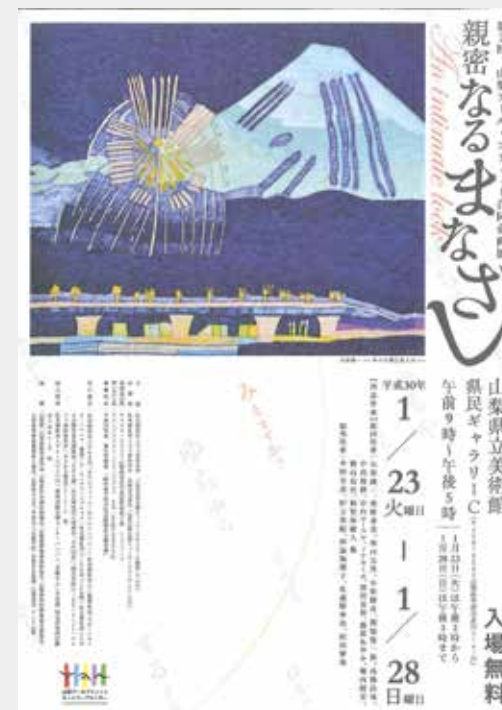
これまでの事業活動で積み上げてきた成果を広く発信することをねらいとして、活動の過程で連携を深めてきた障害者の芸術活動の支援にかかわる施設および団体の職員や特別支援学校の教員などに参加していただき実行委員会を立ち上げました。委員会においては、

相互の連携や情報交換などを通して新たな作家や作品を発掘するとともに、作品選定や展示方法の検討を一緒に行うことで、創作活動を支援する体制の拡充と活動全体の底上げをめざしました。

実施内容

実行委員会にて、表現者が対象に向けるまなざしに焦点を当てた作品選定を行い、県外のアール・ブリュット作家5人の作品13点と、県内の作家22人の作品80点を展示しました。関連イベントとして、県立美術館館長の青柳正規氏による「日本のアール・ブリュットについて」と題した記念講演を開催するとともに、出品作家や支援者によるギャラリートークを実施して、制作の様

子や制作に向かう作家それぞれが大事にしている思いについてお話いただきました。そのほか、会場内で作家と支援者、来場者がみんなで一つの作品をつくる自由参加型のワークショップや障害者が地域に温かく受け止められて働く窯業の里・信楽で撮影されたドキュメンタリー「しがらきから吹いてくる風」の上映会も行いました。



左 | 合同企画展チラシ 右上 | 展覧会実施体制イメージ 右下 | ワークショップの様子

成果

日ごろから創作活動を支えている支援者が実行委員として作品選定や展示に加わることで、展示方法の細かな工夫や日ごろの創作の様子が見える作家紹介文の掲示につながり、作家と作品の個性や魅力を最大限に引き出すことができました。また、発表の場が少ない作家の作品を紹介できたことにより、作品を観てもらっ喜

びにつながり、創作意欲の向上に貢献することができました。さらに、県内における芸術文化の中心拠点である県立美術館で開催できたことで、複数のメディアにも取り上げられ、これまで障害者の芸術作品に触れる機会の少なかった人たちも含めて多くの関心を集め、社会に向けてその価値を広く発信することができました。

愛知県



Aichi Artbrut Network Center (AANC)

〒443-0021 愛知県蒲郡市三谷町若宮99番9(NPO法人楽笑内)
TEL: 0533-66-6228 FAX: 0533-66-6229 MAIL: aanc@rakusho.info URL: http://aanc.jp/

実施団体

特定非営利活動法人 楽笑

実施団体概要

生活介護事業、就労継続支援B型事業、相談支援事業、放課後等デイサービス事業のほか、まちづくりプロジェクトにも取り組んでいます。2011(平成23)年2月に生活介護事業を開始した際に、障害のある方の活動の幅を広げる取り組みとして芸術文化活動を定期的実施するようになりました。12(平成24)年から地域住民への啓発事業として、障害者に対する理解を進める展示会を年2回開催しています。14(平成26)年に放課後等デイサービスを開所した際は、通所する障害児にも芸術文化活動を取り入れるなど、法人全体で芸術文化活動を積極的に進めてきました。15(平成27)年には地域住民にも開かれたギャラリー「小さな蔵の展示室となりのかぐら」を開設し、地域交流も図っています。障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会にも加わり、フランスやスウェーデンなどでのプロジェクトにも積極的に参画しています。

都道府県の現状と課題

16(平成28)年開催の「第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会」がこれまでの活動の歴史を大きく深化させるきっかけになり、この地域では、20(平成32)年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、障害者芸術文化の推進に対する機運が高まっています。さらに「あいちアール・ブリュット展」や「あいちアール・ブリュット優秀作品特別展」が継続されて

いることで、多くのギャラリーで展示会が開催されるなど、社会福祉法人をはじめとする福祉施設や芸術文化を主とした多くの市民活動団体、ボランティア組織が連携しており、積極的な動きと環境が整ってきていると言えるでしょう。しかし、さらなる芸術文化活動の推進には、これまでの活動に加え、新しい試みが必要になります。

今年度の取り組み概要とねらい

長い歴史を誇る県の障害者芸術文化活動のポテンシャルは高く、福祉と芸術分野の連携は始まったばかりですが、順調に確立し始めています。その一方で、芸術文化活動をさらに推し進めていくためには、新たな試みとして他分野との協働も必要です。地域の産業や観光といった他分野との連携を取り入れることで、

普及に向けた新たな活動が生まれること、新しい可能性の創出が期待できるからです。そこで、福祉と芸術分野のみならず、他分野と幅広く協働し、つながることのできるセンター機能を充実させる必要があると考えました。

今年度事業の成果

県内で芸術文化活動実績のある障害福祉事業所とこれから活動を始めようとする福祉事業所との人的な関係性が構築できました。そのネットワークから新たな学びと気づきがあり、お互いをエンパワーメントする(力を付ける)ことができ、障害者の芸術文化活動における必要な人材育成につながりました。今までかかわったことの

ない他分野の人に、障害のある人たちの持つ素晴らしい表現力と感性に触れ、障害者芸術文化活動の魅力に気づいてもらったことで、普及効果が格段に上がりました。この芸術文化活動という手法は、障害者への理解・啓発に留まらず、今の時代に必要な「本当の豊かさ」を教えてくれるものだと思っております。

取り組み紹介

「“あいち”まちじゅうアール・ブリュット展」

日程 | 2017年12月1日(金)～2018年3月8日(木) 会場 | 三河地区を中心に4会場で開催

取り組みのねらい

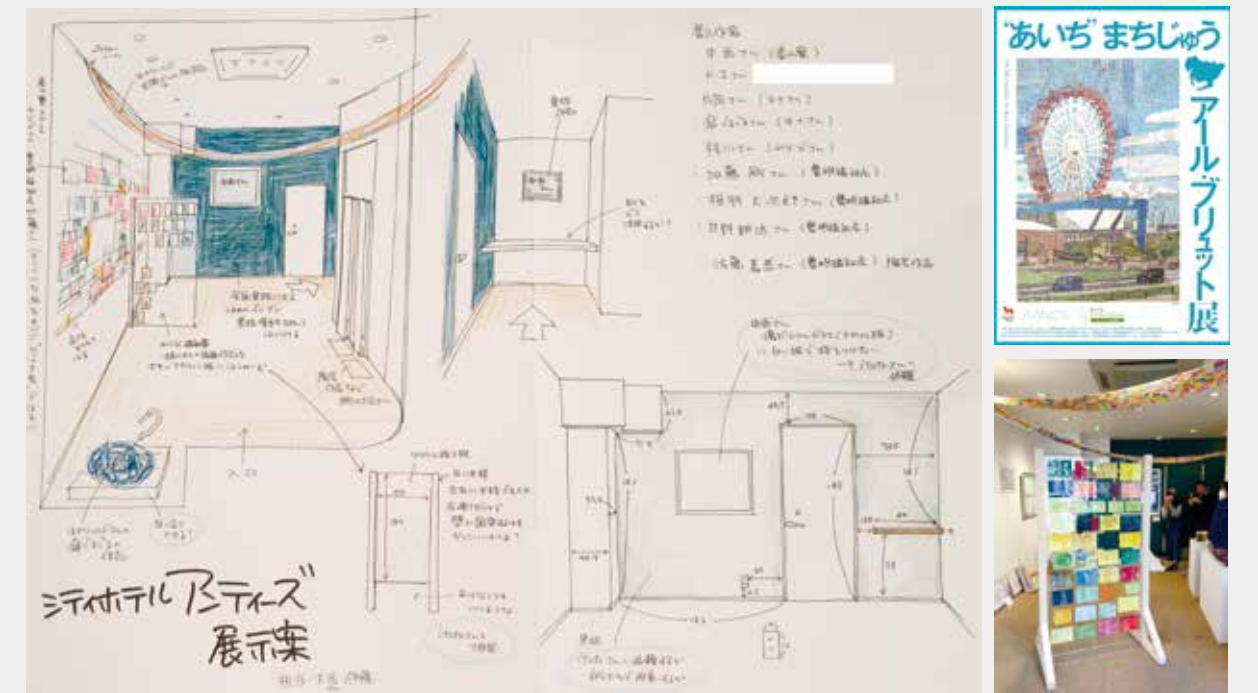
県内の福祉事業所や学校、作家を調査し、多くの作品を発掘することができました。その過程で出会った人たちと実行委員会を立ち上げ、福祉や芸術文化分野だ

けではなく、観光・製造業との協働から生まれる「新しい普及のカタチ」をテーマに県内4カ所で展示会を開催しました。

実施内容

実行委員会で、コンセプトづくり、展示に向けたワークショップを行いました。会場ごとのコンセプトは次の通りです。①蒲郡の老舗旅館「三谷温泉平野屋」には、郷土に縁のある作家の作品を中心に集めました。地元の風景をもとにした作品や、地元で日々制作されている絵画や陶芸作品を展示しました。②「蒲郡信用金庫本店」では“ごちゃまぜアール・ブリュット”をテーマに、ポップ

でカラフルで、“なんだこれは?”とつい見入ってしまうような作品を集めました。③「愛知トヨタ蒲郡営業所」では、車への愛情あふれる作品を中心に展示しました。内部まで緻密につくりこんだ車型の陶芸作品もありました。④「シティホテルアンティーズ」では、“これもアートなの?”と、既成概念にとらわれないアール・ブリュット作品の魅力をさまざまな展示方法でお伝えしました。



左 | ワークショップによる展示案 右上 | 展示会チラシ 右下 | 展示会の様子

成果

4会場の来場者はのべ6409人にのぼり、多くの人たちに障害のある人の作品に触れていただくことができました。また観光業界のインバウンド効果もあり、ホテルでの展示は外国人観光客からの評価も高く、その結

果、会期を予定より1カ月延長することになりました。東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた外国人宿泊者への誘客手段の一つになるのではないのでしょうか。

滋賀県

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター (アイサ)

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837番地2
TEL: 0748-46-8118 FAX: 0748-46-8228 MAIL: artbrut_info@glow.or.jp URL: http://info.art-brut.jp/

実施団体

社会福祉法人 グロー (GLOW) ～生きることが光になる～

実施団体概要

障害者の文化芸術活動支援に関する取り組みは2001 (平成13) 年、企画事業部設置を機にスタートしました。舞台芸術分野では、02 (平成14) 年から障害の有無にかかわらず、歌、ダンス、演奏などの公演を実施している「糸賀一雄記念賞音楽祭」の事務局として、県内6カ所でのワークショップの立ち上げや運営サポートをしてきました。美術分野では、04 (平成16) 年に「ポードレス・アートミュージアムNO-MA」を開館し、これまでに館内外で70本の企画展を開催しています。また12 (平成24) 年から全国に先駆けて障害者造形活動支援センター「アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター (アイサ)」を開設し、14 (平成26) 年から16 (平成28) 年まで「障害者の芸術活動支援モデル事業」の全国連携事務局を担当しました。

都道府県の現状と課題

16年の県の調査結果によると、造形活動を行っている事業所数は年々増えており、県域にある77事業所のうち、47事業所で著作権を意識した取り組みがされています。県の公募展への応募者数は前年度比81人増でした。舞台芸術においては、59事業所が舞台表現に関する取り組みを実施しています。02年から合唱やダンス、打楽器演奏などを実施する表現活動

ワークショップを県内6カ所で継続しており、16年には高齢者や生活困窮者などを対象としたワークショップも行いました。課題として、舞台芸術分野についての相談スキルを習得することや活動を行う福祉事業所の現状を把握することが必要であり、発表の機会の拡充にも取り組むべきと考えます。

今年度の取り組み概要とねらい

本事業が始まって約160回の相談対応を実施しました (2018年3月10日現在)。今年度から舞台芸術分野が対象となったため、実演者の権利保護に関して弁護士からのスーパーバイズを受け、アドバイザーのスキルアップに取り組みました。「美術+舞台芸術 障害者の芸術活動支援セミナー」では、活動体験、権利保護、

技術研修、鑑賞支援に関する多様な研修会を行いました。県内27機関と連携して「第14回滋賀県施設・学校合同企画展」を開催したこと、県内22機関と協力して「糸賀一雄記念賞音楽祭」を開催したことは、障害者の作品を広く発表するだけでなく、ネットワークづくりにおいても効果的であったと言えます。

今年度事業の成果

16年度までに県内で必要となる事業が整理されていたため、今年度は計画的に事業を進め、利用者のアンケート結果ではいずれも高い満足度を得ることができました。新たな取り組みとして、弁護士の助言を得て、実演者の権利保護に関する相談への対応内容を検討したことは、今後活かされる成果になりました。研修会では、障害種別によらず鑑賞できるプログラムを実

施し、ソフト面でのアクセシビリティを検討しました。県施設・学校合同企画展の関連イベントで、地域のイベントスペースにて歌やダンスの発表を行い、既存の団体では活動していない障害のある方々がパフォーマンスをする機会を創出しました。このことは多様な発表の場づくりを今後検討していく上で重要な取り組みとなりました。



取り組み紹介

「発達障害者との作品鑑賞プログラム」

日程 | 2017年11月18日(土) 会場 | ポードレス・アートミュージアム NO-MA

取り組みのねらい

誰もが作品鑑賞を楽しめるように企画したプログラムの一つで、発達障害のある方を対象にして作品鑑賞を実施。参加者それぞれ空間や作品の感じ方に違いがあ

ることを、グループワークや対話型鑑賞を通して知ることを目的としました。

実施内容

開催に先立って、オリエンテーションを実施。報告用の写真を撮影することや会場のトイレ、休憩スペース、当日の時間割などについてアナウンスしたのち、発達障害のある人、ない人、混合の3つのグループを編成して、1日の流れを説明しました。その後、次の2つのテーマで展開しました。

①「環境を考える」=自分の好きな場所と苦手な場所をカメラで撮影してもらいました。手がかりとして、会場の明るさ、聞こえてくる音、作品が設置されている高さについて意識してみてもどうかと具体的に提示。グループごとに撮影した画像と、好き・苦手の理由(畳が落ち着く、ブラインドのしみがかわいい、温湿度計が壁の色と違和

感がある、室外機の音がうるさいなど)を共有し、苦手な場所を克服するアイデアを出し合っ、できる範囲で実際に解決してみました。

②「作品の見方を考える」=鑑賞する作品を選定して5分ほど個々で鑑賞してもらい、「最初に気づいたことは?」「印象は?」「何でつくられている?」「色から気づくことは?」「作者はどんな人?」という問いかけもしました。鑑賞して気づいたことや感じたことを付箋に書き出し、順番に発表。その際、一つの気づきや感想ごとに、似た気づきや違う気づきなど関連する意見を求め、お互いの感じ方に違いが見つかるように進行了ました。最後に作者の意図を共有しました。



左 | 選んだ作品を鑑賞 右上 |好きな場所、苦手な場所を撮影 右下 | 気づいたことを書き出して共有

成果

「普段は作品をじっくり見るができないので鑑賞の仕方が参考になった」「ほかの人と作品の見方についてコミュニケーションを持てるのは意外と面白いと知った」といった感想が寄せられました。試行的実践でした

が、今後の継続を望む声があり、参加者の満足度は高いものでした。発達障害のある人の作品鑑賞支援はほとんど取り組まれておらず、今後も広く取り組んでいくべきものだと考えます。

大阪府

国際障害者交流センター ビッグ・アイ

〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL: 072-290-0962 FAX: 072-290-0972 MAIL: arts@big-i.jp URL: http://big-i.jp/



実施団体

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

実施団体概要

2011（平成23）年より社会福祉法人大阪障害者自立支援協会が代表となり、「国際障害者交流センター ビッグ・アイ」を運営しています。全国の障害のある人の芸術文化活動拠点をめざし、福祉と芸術に関する知識や経験が豊かな専門スタッフによる運営のもと、障害のある人が芸術文化を通じて自己評価を高め、社会とつながる機会を創出する事業を展開してきました。障害の有無を越えて、人間であることの真の多様性を互いに尊重し合えること、障害のある人の日常生活における選択肢を増やし、より豊かな人生を過ごせることをめざして、芸術文化事業を展開しています。

都道府県の現状と課題

舞台芸術分野では、表現活動や鑑賞機会を創出するには専門的なノウハウや人材が必要ですが、福祉と舞台芸術をつなぐ仕組みがないことが障害のある人の舞台芸術活動の普及を阻んでいると考えられます。また、地域の文化拠点である公的文化施設の文化事業者には、障害のある人への事業制作ノウハウの不足や認識のズレなどがあります。誰もが参加可能な事

業づくりのできる人材育成が必要です。美術分野では、各障害者施設などが個性を活かしながら独自の活動スタイルを続けてきたことから、施設間の交流や情報共有、協働活動などがほとんどありません。トップレベルのアーティストを輩出する施設と草の根レベルの活動を行う施設や個人との隔たりも大きく、これらをつなげる仕組みがないことが課題です。

今年度の取り組み概要とねらい

「多様な選択と新たな価値観の創出」を掲げ、障害者の表現活動やアート作品が持つ芸術的価値、社会的価値をさまざまな形で新たに見出せる環境と人材を生み出すことを目的に事業に取り組みました。ダンス、演劇、音楽など多彩なジャンルの舞台表現活動のほかで、障害のある人を支援できる人材育成と、成果発

表を通じて多様な人々がともに表現することにより、新たな芸術作品と社会的価値を見出す機会を創出する取り組みを行いました。また美術分野では芸術的価値だけにとらわれず、障害のある人の日々の豊かさや生きがい、他者との関係性を生み出す手段としての表現も大切であることも広く発信しました。

今年度事業の成果

舞台芸術分野では、障害のある人の表現活動における人材育成をする上で、障害の種別や程度、創作内容などによって、どのような場面でどんな人材支援が必要とされているかを検証できました。きめ細かな対応ができる人材を育成するプログラムづくりを次年度につなげていきたいと思えます。美術分野では、美術的評価ではなく、「表現と人」との関係性を基準に、施設スタッ

フ、アーティスト、ギャラリスト、アートディレクターなど、障害のある人の美術活動にかかわる多分野の人々によって参加型展示会を開催。「表現と人」との関係性について深く考え、障害者の芸術活動支援における本来の使命を再確認し、成果を府内の事業所や関係者と共有できました。障害のある人の表現活動のすそ野を広げることにつながるプログラムとなりました。

取り組み紹介

参加型展示会「about me～“わたし”を知って～」

日程 | 2017年12月8日(金)～10日(日) 会場 | ディアモール大阪 多目的空間DiA ROOM

取り組みのねらい

作品至上にならず、“その人”が表現することの意味、表現することによって何をえられるのか、日々の生活と表現することの関係性を再考する機会をつくること、作

品だけでは見えない“人”を伝えることによって、「障害者＝優れたアーティスト」という偏りをなくし、社会のなかでともに日常を生きる姿を伝えることをめざしました。

実施内容

府内で障害のある人の美術活動を行う事業所など6団体が参加し、参加事業所の担当スタッフ、アーティスト、ギャラリストなど、障害者の美術活動の周縁にいる人によって、日常と表現の関係性という新たな評価軸を作

成し、各事業所に赴き、作品と作家を選定しました。選ばれた作家による作品と、日々の生活の写真や映像を併せて展示しました。



左 | 評価・選定の様子 右 | 展示会の様子



成果

障害のある人の美術活動・表現活動によって何を伝えたいのか、表現と人、表現することの意味を日々かかわる支援者が再考できたことによって、これまで気づかなかったメッセージや表現活動を支援していく本来の目的が見えました。それぞれの事業所が個別で活動することが多い大阪ですが、「美術活動の経験が豊富な事業所」と「経験の浅い事業所」が共同で展示会をつ

くったことで、ノウハウを共有することができました。展示会後記として成果物の冊子を作成し、今回得た情報やノウハウ、手法などを広く発信することもできました。今後の課題として、障害のある人の美術展が「現代アート」として多く開催されるなか、「福祉」に焦点を置いた展示会に福祉分野以外の人にも足を運んでもらうためにはどうすればいいのか、工夫する必要があります。

奈良県

障害とアートの相談室

〒630-8044 奈良県奈良市六条西 3-25-4

TEL: 0742-43-7055 FAX: 0742-49-5501 MAIL: artsoudan@popo.or.jp URL: http://artsoudan.tanpoponoye.org/

実施団体

一般財団法人 たんぽぽの家

実施団体概要

「アート」と「ケア」の視点から多彩なアートプロジェクトを実施している市民団体です。ソーシャル・インクルージョンをテーマに、アートの社会的意義や市民文化について問いかける事業を展開してきました。2014（平成26）年からは県内の障害のある人によるアート活動の普及・支援を目的とした「障害とアートの相談室」を開設。アート活動にかかわる相談を広く受け付けるのはもちろん、支援の方法や知的財産権を学ぶ研修会、障害の有無にかかわらず誰もが参加できるアートワークショップ「オープンアトリエ」の開催などを通じ、県内の障害のある人のアート活動を盛り上げ、支えていくことを志してきました。

都道府県の現状と課題

「奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA」（主催：奈良県）などの開催により、障害のある人たちのアート活動に関しては一定の認知と理解が得られています。また、本年は「第32回国民文化祭・なら2017」「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」の一体開催により、一層の注目が集まりました。近年では独自のアート活動を行う福祉施設や個人も増えてきて

おり、過去3年間の「障害者の芸術活動支援モデル事業」の実施などにより、そういった実践者間のネットワークも少しずつ構築されているように見受けられます。しかし一方で、地理的事情などにより、人口の大部分が北部地域に集中しているため、東部・南部地域での文化活動の支援があまり進んでいないという課題があります。

今年度の取り組み概要とねらい

これまでの障害とアートの相談室の活動を通じ、県内の障害のある人たちの芸術活動の現状や課題が少しずつ明らかになってきました。これまでの障害とアートの相談室の活動は絵画や彫刻といった視覚芸術分野を主な対象としており、ダンスや音楽といった舞台芸術分野はあまり多くありませんでした。そこで今年度

は、県内で障害のある人との舞台芸術活動を行っている団体・個人の基礎調査を中心に、舞台芸術を学び、体感するためのレクチャーや先進的な活動を行っている実践者によるワークショップなどを行うことにより、県内の芸術活動の基礎的な動向を改めて把握し、さらなる活動の支援を行うことを試みました。

今年度事業の成果

「調査事業」と「レクチャー・ワークショップ」の2つの取り組みにおいて特に成果が得られました。まず調査事業は、県内の福祉施設に向けてパフォーマンス活動に関するアンケート調査を実施。際立った活動を行っている施設・団体を訪問し、インタビュー調査も実施しました。これらの調査を通じて、東部・南部地域を含め、県内の舞台芸術活動について全体的な状況を把握することができました。次に、パフォーマンスについて

学ぶレクチャー・ワークショップでは、先進的な活動を行っているアーティストを招き、事例を紹介してもらうとともに、実際に参加者がパフォーマンスを体験するワークショップを開催。これらのセッションを通じ、障害のある人のパフォーマンス活動に関する議論が重ねられ、今後の活動の指針となるような多様なキーワードを得ることができました。



取り組み紹介

「パフォーマンスアーツを体感しながら学ぶ2日間」

日程 | 2018年1月20日(土)・21日(日) 会場 | たんぽぽの家

取り組みのねらい

パフォーマンスアーツの普及・支援のための第1歩として、多様なパフォーマンスを体感しながら学び合い、そ

の意義や価値を考える場づくりを目的に、2日間のレクチャー・ワークショップを開催しました。

実施内容

1日目は、沼田里衣氏(大阪市立大学テニユアトラック研究員、おとあそび工房)、いしいみちこ氏(ドラマティチャー)、森田かずよ氏(女優、ダンサー)を講師に招き、ご自身の活動の紹介を主としたレクチャーを行いました。夜には中川真氏(大阪市立大学特任教授)のコーディネートのもと、交流会を開催。食事を囲んでの緩やかな雰囲気の中、さまざまな議論や交流を行いました。2日目は、沼田里衣氏、佐久間新氏(ジャワ舞踊家)、佐藤拓道氏(俳優)を講師に、音楽、ダンス、演劇のワークショップを実施。障害のある人とのパフォーマンス活

動を行っている3氏の活動のエッセンスに触れ、参加者それぞれがこれからの活動のヒントを探る時間になりました。また、ワークショップ後には参加者全員での振り返り会を実施。それぞれの参加者が経験し、考えたことを共有する時間を設けました。特別企画として、身近な道具を用いたサウンドインスタレーションや子どもたちとのパフォーマンス制作など幅広い活動を行う梅田哲也氏(美術家)を招き、ご自身の従来のアートの枠にとらわれないような作品の取り組みを紹介してもらいました。



左 | レクチャーの様子 右上 | 演劇ワークショップの様子 右下 | ダンスワークショップの様子

成果

2日間を通じ、参加者がパフォーマンスアーツについて学んだだけでなく、そのあり方や評価を考えるきっかけになるようなキーワードが得られました。これらに基

づき、今後の「障害者芸術文化活動普及支援事業」を行う際の一つの指針となるような、障害のある人のパフォーマンスに関する小冊子を作成しました。

和歌山県

美術

和歌山県障害者芸術文化活動支援センター わがらあと

〒649-2102 和歌山県西牟婁郡上富田町岩田2456-1

TEL: 0739-34-2808 FAX: 0739-47-6645 MAIL: wagara-art@wfj.or.jp URL: http://www.wfj.or.jp/office/3221

実施団体

社会福祉法人 和歌山県福祉事業団

実施団体概要

県立の社会福祉施設を受託運営するために、和歌山県によって設立された社会福祉法人です。現在は、県立施設の移譲を受け、主に当法人が施設を所有し、運営を行っています。法人理念に「普通（ノーマライゼーション）の社会づくり」を掲げ、創作活動にも積極的に取り組み、地域での陶芸展や書道展、絵画展などを福祉事業所単位で開催するとともに、県内2カ所にアートギャラリーを開設して、2015(平成27)年度より企画展「アールブリュット和歌山展」を実施しています。県内各地で、障害者の創作活動や支援活動は行われていますが、当法人ではより一層の芸術文化活動の発展を目的として、ネットワークの構築、作者の発掘、作品の効果的な発信を図りつつ、作者の権利保護などに取り組んでいます。

都道府県の現状と課題

県内の各団体では絵画、写真、書道、立体造形、陶芸、映像など多様な分野にわたって取り組みが行われています。県としては「ジュニア県展（小中学生対象の美術展覧会）」の際に特別支援学校の作品展示を行っており、また和歌山県障害児教育振興会主催の「和歌山かがやき展」も毎年開催されています。このような取り組みによって、県内に在住する作者や作者

が生み出す質の高い作品への注目も高まりつつあります。しかし一般への認知度は低く、各団体が単体で取り組む現状を変えなければ多くの県民が知らないままであり、作品が持ち得る社会への訴求力も限られたものになってしまいます。県内各所で「点」的に展開する芸術文化活動の取り組みを全地域的なものとし、活性化させていく必要があります。

今年度の取り組み概要とねらい

和歌山県で17(平成29)年度初めての実施となった本事業において、「和歌山県障害者芸術文化活動支援センター わがらあとの開設（相談件数13件）」「人材育成のための研修会の実施（5テーマ7会場で実施。のべ109人が参加）」「県内ネットワークの構築とそれを活かした形での参加型展示会の開催（6団体からなる実行委員会を設置。4会場開催で過去最高の来場者数を達成）」

「アンケート調査（571カ所に配付し113カ所から回収）と訪問調査（17カ所）の実施」「調査に基づいた新たな作者・作品の発掘と評価」などに取り組みました。本事業を通して、多様な関係者を巻き込み、「面」的に活動を推進する体制を築きながら、県全体の障害者の芸術文化活動の振興を図り、一般の方々への認知度を高めていくという目的がありました。

今年度事業の成果

「わがらあと」の相談支援から、商店街での作品展示につながった事例や、福祉事業所への働きかけにより創作環境の整備が実現した事例がありました。アンケート調査および訪問調査では、初めて網羅的に県内における各団体の取り組み状況が明らかになり、新たな作者や作品を発掘できました。芸術文化活動に可能性を

見出す団体は確実に増えており、来年度以降はより多くの団体が参加型展示会の実行委員会に加わる見込みです。協力委員会の設置を含め、多様な関係者を巻き込みながら、県全体の障害者の芸術文化活動の振興を図るといふねらいは、おおむね達成することができたと考えています。

取り組み紹介

「アールブリュット和歌山 魂のあうところ」

日程 | 2017年9月13日(水)～18日(月)、10月14日(土)～12月26日(火)、2018年1月6日(土)～16日(火)、2月23日(金)～3月7日(水)

会場 | 和歌山県民文化会館小展示室、ぎやらりーながわ、紀南文化会館展示ホール、太地町立石垣記念館

取り組みのねらい

障害の有無にかかわらず、作者一人ひとりの魂の内なる衝動から生み出される自由な表現との出会いから、新たな感動が生まれること、そして県内に生きる個性

あふれる素晴らしい表現者たちの存在を知っていたくことを目的に、参加型展示会を開催し、「作者紹介・作品写真集」を発行しました。

実施内容

和歌山県福祉事業団が15年度より開催してきた「アールブリュット和歌山展」を、参加型展示会として発展させ、準備などを他団体も参加する実行委員会が担いました。実行委員会の実施回数は少なかったのですが、展示会のサブタイトルになっている「魂のあうところ」という言葉の意味を共有しながら、6団体が協力して県内4会場において開催することができました。なお、「魂のあうところ」とは、「魂の領域には障害は関係な

い。『表現したい』という譲れない想い(=芸術)こそ、魂の行為である」ということから名付けたものです。また、展示会開催だけでなく、作者と作品を恒久的に記録し、発信していく目的で「作者紹介・作品写真集」を発行。掲載作品の選定やレイアウトなどは、評価委員会にも協力していただき、出展作品を再評価し、協議、校正を重ね、31人の作者の作品を掲載しています。



左 | 実行委員会の最後に集合写真(ぎやらりーながわにて) 右上 | 展示会の広報ポスター 右下 | 「作者紹介・作品写真集」の表紙



成果

先行展、本展、巡回展(2会場)で、断続的に半年間にわたる展示会となりましたが、来場者数は合計2405人と盛況のうちに終えることができました。実行委員会に参加した各団体にとっては、障害者の芸術文化活動に取り組む意義や意味を考える場となり、今後のさら

なる展開が楽しみになりました。当県では、2021(平成33)年度に障害者芸術・文化祭の開催が決まっています。「作者紹介・作品写真集」の発行を含め、その機運醸成にもつながったのではないかと考えています。

広島県



アートサポートセンターひゅるる

〒731-0102 広島県広島市安佐南区川内6丁目28-15
 TEL: 070-5671-8668 FAX: 082-831-6889 MAIL: hululu@hullpong.jp URL: http://www.hululu.jp

実施団体

特定非営利活動法人 コミュニティリーダーひゅーるぼん

実施団体概要

地域の障がいのある子どもたちの長期休暇中の支援を目的にしたプログラムに参加したボランティアが、1983（昭和58）年にボランティアグループをつくって活動を始め、地域の障がい児支援に取り組んできました。放課後を一人で過ごす子どもたちが増えている社会状況と自分たちの活動を省みて、子どもたちがいつでも集まれる場所をつくりたいと、01（平成13）年にNPO法人格を取得し、子どもたちの安心と育ちの場である拠点をつくりました。02（平成14）年には、障がいのある大人の社会参画と豊かな生き方のための支援もスタート。子どもから大人までのトータルサポートの視点から発達支援を行いながら、ボランティア育成と、誰もが住みやすいまちづくりの拠点として、地域のなかで活動しています。

都道府県の現状と課題

美術分野では、01年度から当法人が開催する公募作品展を継続しており、13（平成25）年度からは県が中心となって開催する作品展も始まり、取り組みが定着しています。舞台芸術分野では、学校や施設、事業所、教室単位での取り組みが主となり、所属する場所それぞれで合唱、ダンス、バンド活動、伝統音楽などを実施しているという現状で、広く活発にという状況

ではありません。舞台表現の楽しさを伝え、取り組む人を増やしていくために、今年度は県が主体となり、舞台芸術の発表の場をつくりました。始まったばかりなので、今後はまず表現活動に親しむ機会を増やすこと、活動の場を支えていく人を育て、継続していく基盤をつくる必要があると感じています。

今年度の取り組み概要とねらい

舞台表現活動を行う場づくりから取り組みました。地元の舞台制作団体と協働し、障がいのある人だけでなく、演劇に興味のある人や経験者が継続的に活動できる場をめざしました。ワークショップを4回実施して興味のある人を募り、作品づくりと舞台公演を実施。出演希望者に合わせてオリジナル脚本を用意し、演出家の指導を受け、脚本家、演出家、出演者、サポートす

る人の全員で演劇作品をつくり上げました。芸術性の高い作品をめざしたこと、参加者を制限せずに広く募ることでさまざまな可能性を探りました。一つの演劇作品をつくるという同じ目標を持って取り組むことで、演劇の専門性のある人や障がいのある人が一人の人として交わり、支援する・される場ではなく、表現者として相互に高め合う場をめざしました。

今年度事業の成果

障がいのある人の本格的な舞台表現の取り組みを初めて行いました。多種多様な舞台表現のなかから演劇に特化し、演劇の手法を用いたアプローチを通して、人がつながり合う場をつくり、芸術的な評価が得られる作品をめざしました。初めて出会う人同士の心が近づいていく過程を大切に、作品をつくり上げていく行程を通して、「共に生きる」アプローチの一つを示すことが

できたのではと考えています。取り組みは始まったばかりで、表現活動のすそ野を広げていく段階ですが、表現する楽しさを知ってもらうこと、演じる側の喜びが観劇する側の喜びにつながることを感じてもらえ、舞台表現に取り組む意義と可能性を広く示せたと考えています。

取り組み紹介

演劇公演 おきらく劇場ピロシマ「ウタとナンタの人助け」(演出|永山智行 作|柳沼昭徳)

日程|2018年1月13日(土) 会場|広島市東区民文化センター

取り組みのねらい

演劇をキーワードに集まった多様な人たちが公演実現をめざす過程で、相互に理解を深め、学び合い、自己を高めることができる場をつくること。演劇の公演を

通して、演じる側・観劇する側双方が、ともに生きる幸せや喜びを具体的に感じられることを目的にしました。

実施内容

演劇に興味のある人を広く集めるワークショップを開催し、そのなかから出演を希望する有志で自主稽古を重ね、演劇公演(2ステージ)を実施。参加者は、障がいのある人や演劇活動を行っている人、興味のある人、学生な

ど幅広く集まりました。併せて、全国で活躍している演出家と脚本家を招き、そのサポートを地元の舞台制作団体に行っていただくことで、演劇ファシリテーターの育成にも取り組みました。



左|出演者 右上|リハーサル風景 右下|舞台美術

成果

ワークショップを4回実施したほか、公演に向けた自主練習会を10回行い、のべ252人の参加がありました。本公演は2回ともほぼ満席となり、合計来場者数117人(合計座席数120席)で動員率98パーセントでした。公演は有料でしたが、チケットは前売り段階でほぼ完売し、ゲネプロも一般公開にするなどして対応しました。この取り組みに対する期待と反響の高さを感じました。来場者から、「本当に感動した」「これで終わりにするのは

もったいない」「たくさんの人に観てもらえる場があったらいい」など作品の広がりや発展を求める声が多く、学校を含めた公演形態の模索、新作の制作について検討することにしました。障がいのある人を含めた多様な人たちが相互理解と成長を重ねながら、作品を生み出していくプロセスを確立していくとともに、このプロセスが舞台を通して伝わるような作品づくりを今後も行っていきたくと考えています。

福岡県



障害者芸術文化活動普及支援事業所 SCORE

〒838-0106 福岡県小郡市三沢水沢465-3
TEL: 0942-72-0667 FAX: 0942-41-2155 MAIL: score@lifestage.jp URL: http://lifestage.jp/

実施団体

特定非営利活動法人 らいふステージ

実施団体概要

「あなたと共に歩きたい あなたと共に生きていたい あなたと共に育っていききたい ただ人として同じ人間として」を理念として、2014（平成26）年に立ち上げました。当初から音楽を支援ツールとして活用することをめざしており、当法人が運営する事業所の名前に「セレナーデ」「コンチェルト」「メヌエット」など音楽にまつわる言葉を用いています。また地域住民に気軽に足を運んでもらえる事業所となれるよう、毎月無料でライブを企画し、プロのミュージシャンによる慰問を実施。16（平成28）年からは支援者と利用者によるロックバンド「Vivimos」を結成し、地域での演奏活動を続けています。

都道府県の現状と課題

小郡市と周辺の太宰府市、筑紫野市、久留米市では、障害者の美術活動に力を入れる施設が増えています。造形作品やイラスト、絵画などを販売したり、カレンダーやキーホルダーといったグッズを製造・販売することで収益を上げて工賃として支給するなど、美術分野を就労系の福祉サービスとして取り入れる事業所も増えています。一方、舞台芸術分野を就労系の福

祉サービス事業の一環として行っている事業所はまだ少ないのが現状です。演劇や音楽、ダンスなどを行ってみたいという希望はあっても、「年1回の発表会で終わってしまう」「発表する場所がない」「指導できる人材がない」「支援者同士の情報交換を行う場がない」など多くの課題があります。

今年度の取り組み概要とねらい

舞台芸術活動にかかわる団体や事業所の疑問・課題解決および情報交換、ネットワーク構築のため、相談窓口を設置。障害者の舞台芸術活動の普及をめざして、「Vivimos」のコンサートツアーを開催。地域で舞台芸術活動を行っている団体の発掘や公営施設で実践できる鑑賞支援の検討、障害者福祉団体と舞台芸

術団体を橋渡しする役割などを試みました。また県と協働してアンケート調査を実施し、舞台芸術活動を実践している事業所や個人で活動しているパフォーマーの調査・発掘、舞台芸術活動を支援ツールに取り入れている事業所の課題や潜在的な悩みの抽出をめざしました。

今年度事業の成果

「Vivimos」のコンサートツアーを通して、障害者が地域の一人であることを多くの人たちに発信でき、会場では舞台芸術に取り組む上での悩みや疑問の相談を受けました。県と協働した障害者芸術活動に関するアンケート調査では、各施設や学校の抱える悩み、実際に舞台芸術に取り組む団体を把握できたため、今後の

ネットワークづくりに役立つ情報になります。公営施設での鑑賞支援の工夫により、聴覚障害者席の配置、電動車イスの充電用の電源確保、鑑賞が難しくなった人々へのクールダウンスペースの設置などの配慮ができる支援者が増えました。

取り組み紹介

「Vivimosノーマライゼーションコンサートツアー ～生命～」

日程 | 2017年9月23日(土)、12月2日(土)、2018年3月3日(土) ほか

会場 | 城島総合文化センターイベントホール、大川市文化センター、小郡市文化会館大ホール ほか

取り組みのねらい

知的、精神、身体に障害のある方々とその支援者によるロックバンド「Vivimos」のコンサートを通して、会場に訪れた地域住民とバンドの演奏を楽しみながら、「障

害とは」「人とは」「共に生きるまちづくりとは」を考えるきっかけを提供しつつ、障害者の舞台芸術を普及するための活動を展開しました。

実施内容

ノーマライゼーションコンサートツアーは、福岡県と佐賀県の各所で全9回行いました。コンサートの前には、バンド活動を行う障害者とその支援者によるシンポジウム、自閉症のある子どもを持つ父親による講演会、音楽を通して長年障害者支援に携わってきた方々による

トーク&ライブなどを実施。それぞれの会場では、子ども太鼓やチンドン隊、子ども舞踊、和太鼓、ハーブ奏者など舞台芸術活動を行っている団体と「Vivimos」によるコラボ演奏を行いました。



左 | 毎回のツアー実績広報誌 右上 | 9月開催時ポスター 右下 | 3月開催時ポスター

成果

演奏会場ではほかの障害者支援事業所から相談を受けることができました。主な内容は「障害福祉事業としてのバンド活動の実際」「必要な音響機器や備品について」「音楽活動を収入とするための具体的な方法」などでした。実際に音楽活動を実践している事業所と情報交換や交流を行うこともありました。会場での来場者アンケートでは、「障害がある人もない人も同じ地域で

暮らせる方法を考えていきたいと思った」「同じ地域で素敵な活動をされていて励みになった」「一生懸命に歌う姿に感動した」「元気をもらった」といった感想がありました。障害者と支援者という包摂的な構成で、一人ひとりの多様性が発揮され、観ている人たちに平等性や受容、そして舞台芸術活動の素晴らしさを感じてもらうことができたのではないかと思います。

佐賀県



Saga ArtBrut Network Center (サンク)

〒849-0934 佐賀県佐賀市開成4-5-4

TEL: 080-2794-6195 FAX: 0952-20-0254 MAIL: info@s-brut.net URL: http://s-brut.net/

実施団体

社会福祉法人 はる

実施団体概要

2002（平成14）年に設立して以降、「障がいのある人や社会のすべての人たちが、一人ひとりかけがえのない人生の主人公として、その命が尊重され、生涯を通して地域とともに幸せに暮らしてもらおう」という理念の下に、福祉支援サービスの創造と展開、整備を積み上げてきました。「Saga ArtBrut Network Center」を15（平成27）年にオープン。子どもから大人まで仕事や活動を通して地域の方々と触れ合ったり協働したりすることで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域理解が深まることをめざした活動に力を入れています。なかでも、豊かさの一つとして、芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援している方、関心のある方などを対象に「相談」「セミナー」「展示会」「オープンアトリエ」「ワークショップ」などさまざまなプログラムを実施、支援しています。

都道府県の現状と課題

12（平成24）年度に開催された「第12回全国障害者芸術・文化祭が大会」を契機に、毎年イベントが行われるなど、障がいを持った人の文化・芸術活動を広める機会が設けられてきました。一方で、普段の創作機会が少ないことが課題になっています。アンケート調査の結果（13年、15年）、芸術活動に関心があると答えた福祉事業所でも「活動場所がない」「指導者が

いない」「支援方法がわからない」といった回答が目立ちました。つまり芸術活動に取り組みたいと思っても、創作するために必要な環境が整っていないという状況です。芸術文化活動への一歩を踏み出すことに関して、セミナーやコンサルテーション（よりよい援助の在り方について話し合うプロセス）を重点的にを行い、活動事例を増やすことに取り組んでいます。

今年度の取り組み概要とねらい

芸術活動に取り組む福祉事業所が増えている一方で、そうした福祉事業所のなかから、「芸術活動のバリエーションを増やしたい」「生まれた作品をどのように活かしていくか」といった新たな課題も生まれています。今年度はセミナー、ワークショップ、参加型展示会を組み合わせた構成で、「なぜ芸術活動に取り

組むのか」「障がいを持った本人は何を望んでいるのか」といった本質的な部分をそれぞれの創作現場で深めた上で、一つのアウトプットの形として「商品化」「展示」を考える機会をつくりました。またパフォーマンスの分野にも挑戦し、ステージイベントの開催を通してニーズを汲み取りました。

今年度事業の成果

目の前の表現が作品かどうかを判断する支援者の価値観が少しずつ変化してきています。セミナー、ワークショップ、参加型展示会といったプログラムを通して、のべ400人の参加者が、障がいを持った人の表現と向き合いました。そのなかで、展示研修の場では「絵だけが表現ではなく、行為や声も併わせて展示したい」と考え

る支援者や「困った行動とらえられていた落書きに対して、表現の面白さを見出し、自慢できることに変えていった」という支援者など、本人が表現を深めるにつれ、創作活動や作品の幅を広げる事例も現れました。また、パフォーマンスイベントでは、ワークショップ参加者20人とステージ出演者4人が身体表現に挑戦しました。

取り組み紹介

「作品をグッズ化するためのプログラム」

日程 | 2017年8月9日(水)、9月9日(土)、12月16日(土) ほか 会場 | 牛津赤れんが館、プレスポ鳥栖、ポンドバ ほか

取り組みのねらい

創作する本人にとって、芸術活動がどのような位置づけか、どのような発信(グッズ、展示、発信しない)を望んでいるのかを考えました。そうすることで、支援者として、表現の認知の幅を広げ、表現の可能性に気づける

ようになるからです。また、ワークショップを通して、作品を商品化していくために必要なスキル、人材、手順を知ることをめざしました。

実施内容

芸術文化活動をスタートして継続していくなかで、「創作の幅を広げたい」「商品化したい」と思うものの、「なかなか描いてくれない」「つくったけれど売れない」といった課題が支援者から上がってきました。商品化という技術的な部分を学ぶ前に、「目の前の障がいを持った人とどう向き合っていくか。そのなかで芸術活動はどんな役割を担えるか」を考えた上で、ブランディ

ングやグッズ化を進めていくステップを踏むべきだと考えました。そこで、「障がいのある人の表現活動を考えるセミナー(1回)」「オリジナルグッズを作ろう!ワークショップ(4回)」「お気に入りの作品をグッズにするためのセミナー(4回)」「つーつらアート展展示研修(3回)」を実施。のべ400人が参加し、作者や作品を深く知り、紹介する方法を考える機会を持ちました。



左 | 展示研修にて作者への思いを語る 右上 | グッズ化に向けてのセミナー 右下 | チラシ

成果

目の前の障がい者の表現に向き合ううち、支援者のなかでの作品と呼べるものの幅が広がったこと(キャンバスだけでなく、声や行為も対象に)、プログラム参加者がつくった展示会を支援者や保護者が鑑賞した際に価値観が揺さぶられる良い影響があったこと、その上でグッズ化していくためにブランディングやマーケティング

が必要なこと、一般向けに売るためにはデザイナーや業者と協力する必要があることなどを知ってもらうことができました。今後商品化を希望する方には、技術的な部分を学び、協力する段階にスムーズに移ることができます。

長崎県

長崎パフォーマンスネットワークセンター

〒859-1215 長崎県雲仙市瑞穂町古部甲1572(社会福祉法人 南高愛隣会内)
TEL: 0957-77-3600 FAX: 0957-77-3966 MAIL: unzen@airinkai.or.jp URL: http://www.airinkai.or.jp

実施団体

社会福祉法人 南高愛隣会

実施団体概要

多様な福祉サービスを、利用者の意向を尊重して総合的に提供されるよう創意工夫することにより、利用者が個人の尊厳を保持しつつ、心身ともに健やかに育成され、能力に応じて自立した生活を地域社会において営むことができるように支援することを目的としています。その社会福祉事業の一つである「瑞宝太鼓(就労継続支援A型事業所)」は、年間約100公演の依頼を受け、障がい者を個性に変換して和太鼓のパフォーマンスを通じた啓発活動を行っています。また、公演以外にも「和太鼓講習」「太鼓フィットネス」「被災地支援演奏」など、さまざまなプログラムを実施しています。

都道府県の現状と課題

子どもから大人まで音楽や美術などの良質な芸術に触れる機会の提供に取り組み、若者文化を核としたまちづくりなどが「長崎県総合計画チャレンジ2020」に打ち出されています。障がい者においても「長崎県障害者芸術祭」が恒例化され、福祉事業所や市民活動団体の取り組みにより、芸術活動が新たな余暇活動、日中活動のメニューとして取り入れられるようになっ

てきました。しかし一方では、人口減少や高齢化などにより地域活力の低下が懸念され、また障がい者芸術においては、活動を支える支援者の継続性と力量の確保、財政的保障、あるいは活動発表機会の保障などの事由により、単発的事業あるいは継続困難に陥っているところも少なくありません。

今年度の取り組み概要とねらい

協力委員会(関係行政機関、学識者など)、長崎パフォーマンスネットワーク協議会(関係教育機関、各団体代表者など)、評価委員会(舞台芸術専門家など)と専門性を持ったネットワークを構築しました。県内での舞台芸術活動の状況をアンケート調査の上、実態を把握し、パフォーマー(演者)の発掘を行うとともに発表の機会を設け、課

題を踏まえた指導者の養成を行うことを目的としています。これにより、県内における舞台芸術を活性化させるとともに「長崎県障害者芸術祭」との連携も図り、舞台芸術の質の向上につなげ、ひいては文化振興による地域活性化が図られて、障がい者芸術がその一翼を担うことが期待されます。

今年度事業の成果

2017(平成29)年7月から開始した取り組みのなかで、行政、福祉事業所、教育現場、芸術家、学生など関心を持つ方々とネットワークができたこと、アンケート調査と集計を大学生と協働できたこと、見えてきた現場の課題とニーズ、専門家による研修会、問題提起と解決策の発見など、今後につながる要素が表面化してきました。短期間では解決しえない課題にも、今後活かしていくための良い資料が集まりました。また「長崎県障害者芸術祭」

に本ネットワーク協議会から2団体が出演できたことや、協議会構成委員から身近な発表会があればとの提案から、18(平成30)年3月に「ながさきチャレンジステージ2018」を開催できたことも本事業の成果であると考えます。最終の協力委員会、ネットワーク協議会、評価委員会では、この動きと、ネットワークをさらに強化しながら、次年度以降も継続を強く要望することでまとまりました。



取り組み紹介

「夏の終わりコンサート～障がい者芸術と出会うコンサート～」

日程 | 2017年8月29日(火) 会場 | シーハットおおむら

取り組みのねらい

このコンサートでは、「障がい者による優れた舞台芸術の発表」と「文化・教育関係者とともに障がい者芸術を語るトークセッション」を実施しました。障がいのある方ご本人が観覧することによって、舞台芸術への興味、

関心を深めるとともに優れた芸術の生み出し手としての障がい者の存在を社会が共有し、その可能性を探ることを目的としました。

実施内容

障がい者芸術に関心のある福祉事業所や特別支援学校、関係行政機関の職員などを招待して実施しました。トークセッションでは、「障がいのある方へ送るエール」と題して、障がい者文化芸術活動推進について最前線で取り組む文化庁や厚生労働省、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、長崎県担当者に現状報告と期待などを交えた話をしていただき

ました。ステージ発表では、「石見神楽」(鳥根県)と「瑞宝太鼓」(長崎県)がそれぞれのパフォーマンスおよび両者によるセッションを行いました。ワークショップでは、希望者を募って、日ごろ見ることができないリアル風景や舞台裏での専門的な技術者の作業を見学することによって、さまざまな仕事が結集して成立する仕組みを学ぶ機会としました。



左 | フライヤー 右 | 石見神楽と瑞宝太鼓のセッションの様子 右下 | トークセッション登壇者、石見神楽、瑞宝太鼓、関係者との記念写真

成果

来場者数は約500人、遠くは関東をはじめ県外からの来場者も多く、障がい者芸術への関心の高さがうかがえました。それは同時に、情報を求めている現場のニーズなのかもしれません。トークセッションでは省庁での取り組みの最新情報を得ることができ、発表で

は優れた表現者の生のエネルギーを体感することができました。また、参加した指導者や利用者からはパフォーマンスに関心を抱き、自身の表現活動がこれからの夢や希望につながったという感想も多数いただきました。

熊本県

美術

障害者芸術文化活動支援センター@熊本

〒861-0551 熊本県山鹿市津留2022
TEL: 0968-43-2771 FAX: 0968-43-2793 MAIL: ailinkan@magma.jp URL: http://aileans.com/saca/

実施団体

社会福祉法人 愛隣園

実施団体概要

1950(昭和25)年に創設以来、児童養護、軽費老人ホーム、特別養護老人ホーム、障害者支援施設の運営と在宅サービス15事業を行う法人です。障害者支援施設「愛隣館」は、地域に住む障害のある作家を支援したのをきっかけに、熊本県全域で障害者芸術活動支援ネットワークを築くため、2014(平成26)年に市民団体「アール・ブリュット パートナーズ熊本」を創立して事務局を担っています。パートナーズ熊本は、障害のある人々の自立と社会参加の促進ならびに共生社会の実現をめざし、美術館などでの展覧会、震災仮設団地などでの移動美術館を開催しています。過去3年間で約1万人が県内の作家の作品を鑑賞しました。障害のある人々による新しい芸術文化の振興と、認め合っるとともに生きる社会の実現に向かう機運の高まりが、県内で生まれ始めています。

都道府県の現状と課題

これまで、特別支援学校単位や合同での文化祭(作品展)、障害者支援施設単位の作品展、実行委員会主催の「くまもと障がい者芸術展」などが、福祉・教育機関中心で行われてきました。そんな現状のなか、作品の芸術としての価値の周知をめざし、活動をスタート。障害者の芸術活動支援には、作家や家族からの信頼を

得る身近な相談支援機能、美術専門家の展示による作品を大切にしたい発表の場づくりのための人材とコーディネート力、そして一定の財源が必要です。作品を評価する美術専門家と福祉・教育関係者をつなぐ機関や連携スキル、障害者支援施設・特別支援学校など支援者の研修を充実させるべき課題ととらえています。

今年度の取り組み概要とねらい

今年度は、①芸術活動支援に関する相談機能、②支援方法や法律に関する研修を通じた人材育成、③地域に根ざし、多分野と連携する支援のネットワーク、④作家の社会参加につながる参加型展覧会に重点を置いて取り組みました。そのねらいは、「障害のある人々と家族のエンパワーメント」「それぞれの環境で認

められ、生きやすくなること(承認・社会参加)」「作品を通して、障害のある人特有の力と比類のない個性が目に見え、障害の正しい理解・差別解消へとつながること」「作家の表現と過程を大切にすることにより、特別支援学校や福祉施設における支援の質の向上(個別支援の浸透と支援の連続性)が生まれること」の4つです。

今年度事業の成果

熊本県立美術館での展覧会と仮設団地「みんなの家」をはじめ4カ所で開催した移動美術館を通して、5700人を超える人々に作品の魅力を発信できた上、作家への感想が1148件も寄せられました。作家、家族、支援者のニーズに沿って、展覧会や、一泊交流などのピアサポートを育み、創作へのインスピレーションを高める一泊交流研修を取り入れ、地域資源と地域性を活かした

芸術活動支援は好評でした。障害のある作家と家族や支援者同士による仲間としての支え合いと、作品を通じた社会貢献の実感が生まれました。また、6回の新聞報道と2回のテレビ放送で作品の人気の高まりや作家への共感が伝わったことは、作家と支援者の力になりました。まちづくり団体や大学からも来年度の連携依頼があり、活動の幅、支援の輪が広がっています。

取り組み紹介

地域資源の連携ネットワーク型障害者芸術活動支援モデル「熊本方式」 「アール・ブリュット展覧会Vol.3 ～誰に教わったわけでもない。熊本が育んだ魂の表現～」

日程 | 2017年10月3日(火)～15日(日) 会場 | 熊本県立美術館講堂

取り組みのねらい

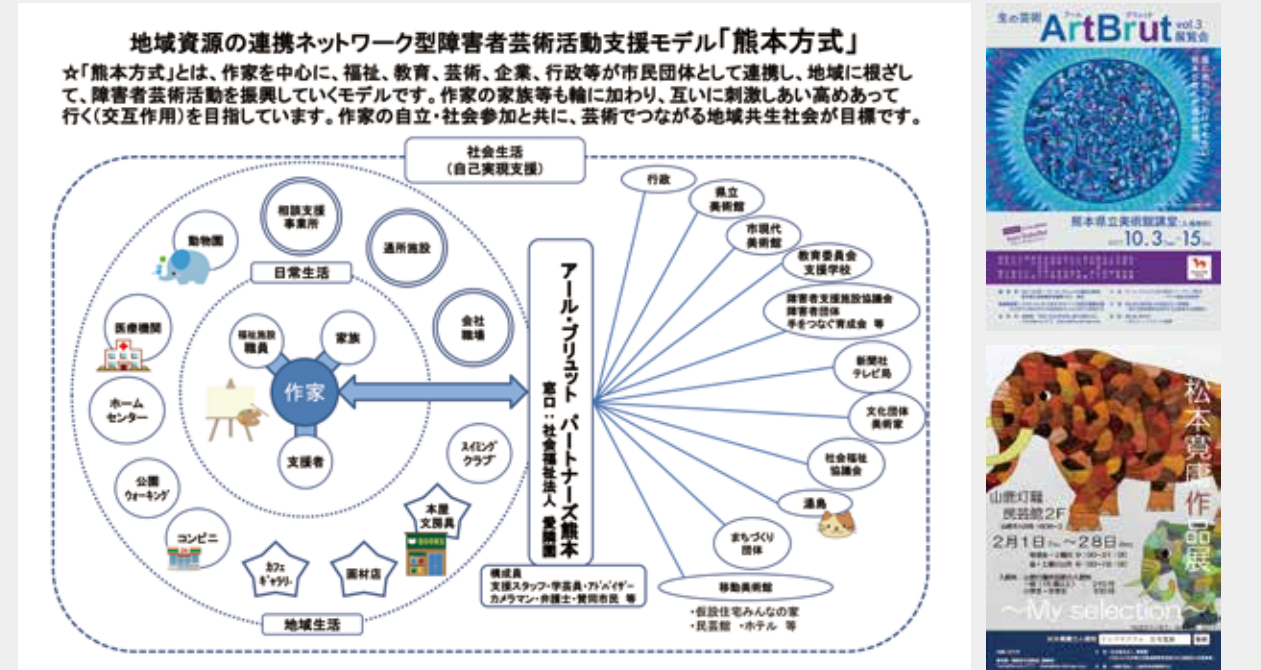
「参加型展覧会」事業を、主催「アール・ブリュット パートナーズ熊本」、共催「熊本県立美術館」「社会福祉法人愛隣園」で実施。各種団体との連携、美術専門家な

どとの連携、作家、家族、支援者などとの連携と参加、作品を通じた来場者との心のコミュニケーションを目標としました。

実施内容

県立美術館の障害者芸術活動への支援により、「県立美術館本館」という県内の美術家が目標とする場所で、「アール・ブリュット展覧会Vol.3～誰に教わったわけでもない。熊本が育んだ魂の表現～」が実現。同じ会場で美術館所有のジャン・デュビュッフェの作品が特別展示されることになり、県内の21人の作家・作品と夢のコラボレーションが実現しました。準備として、展覧会企画ミーティングから作品選考・訪問調査、作家紹介の

ための撮影、ポスターやキャプションなどの制作、広報活動、評価委員会を経て出展作品決定、契約、作品の借り上げ、作品搬入、会場設営を行いました。当日は、オープニングセレモニー、ギャラリートーク(キュレーター・真武真喜子氏)、作家ライブ(作家5人、17回実施)、講演会「アール・ブリュットの潮流と源流」(熊本県立美術館学芸課長・村上哲氏)を行いました。



左 | 障害者芸術活動支援モデル「熊本方式」 右上 | 県立美術館で展覧会 右下 | 作家セレクトでまちづくりに貢献

成果

13日間の開催で来場者2252人、作品の感想、作家へのメッセージ(3カ国語)が704件。たくさんのエピソードとともに、「来場者を元気づける展覧会」と評価されました。多くの人や団体と連携することでみんなの展覧会となり、キュレーターやアーティストによる新しい空間展示の提案、新しい作家や作品の発掘、触発される

人々の増加につながりました。毎日さまざまな出会いが生まれる会場で、「作家ライブ」に輪をつくる人々の表情と、作家、支援者、来場者の自然な交流に、地域に根ざす展覧会の意義を感じました。工事中の熊本城、その城内の美術館から、震災復興への和やかなエネルギーを発信できたと考えます。

大分県



こみっとあーと

〒875-0041 大分県臼杵市大字臼杵72番地137(さぼーとセンター風車内)
TEL: 0972-83-5505 FAX: 0972-63-0791 MAIL: commitart2017@gmail.com URL: http://www.i-mizuho.net

実施団体

社会福祉法人 みずほ厚生センター

実施団体概要

「一人ひとりの尊厳を守り、『共生・共生』の地域づくりに貢献する」を理念とし、介護福祉施設、障がい福祉施設などを運営しています。相談事業所では芸術文化活動の支援を行ってきました。2005(平成17)年から障がいの有無に関係なく地域住民が参加できる「チャレンジ教室」を主催し、音楽、絵手紙、革工芸、エアロビクス、調理などの教室を年100回ほど実施。また県内在住の障がい当事者団体「元気のでるアート!」実行委員会の事務局として展示会などの支援をしています。14(平成26)年度は県の補助金で、県内で障がい者の芸術活動の支援に取り組む「複数事業所連携研修事業」として、12事業所の参加を得て研修会や展示会を実施しました。舞台芸術に関しては、05年から大分大学が開催している「レッツダンスでガッツ元気の会」の活動に月1回参加し、年2回の発表会にも出演しています。

都道府県の現状と課題

1996(平成8)年度から県主催で県内の障がい者作品展「ときめき作品展」を開催、2014年度から障がい者施設や特別支援学校にアーティスト派遣(NPO法人 BEPPU PROJECTが主催)、15(平成27)年度から県外・国外の障がい者の芸術作品の展示や公演を大分県立美術館で実施するなどしています。18(平成30)年度には「第33回国民文化祭・おおいた」「第18回全国障害

者芸術・文化祭おおいた大会」が開催されます。課題としては、創作活動の環境づくり、支援者のスキルアップ(継続した人材育成)、予算の確保、芸術性の高い作品を見極める指導者の確保、地域における展示会の開催や芸術鑑賞の機会の創出などです。事業所や病院によって支援の格差があり、個性豊かな障がい者の芸術文化活動のすそ野が広がりにくい現状があります。

今年度の取り組み概要とねらい

障がいのある人たちが自由に創作活動に取り組むことを支援する場として、芸術文化活動に関心のある障がいのある方を対象に、県内の発達医療センターや障がい者支援施設などと連携し創作活動の場を広げ、芸術文化活動の支援に取り組めます。地域の中核事業所などと連携して、自由に芸術文化活動を展開できる「こみっとあーとアトリエ」を支援の核として、絵画だけでなく、音楽などのパフォーミングアーツを取り入れながら多様性があふれる芸術文化活動を行います。これまで把握できていなかった障がい者アーティストの調査・発掘にも注力。アートマネジメントプログラムの一環として、実習受講生の人材育成も図ります。相談支援、研修会、地域のイベントへの参加、展示会などを実施し、すそ野を広げ、理解者を増やしていきます。

く、音楽などのパフォーミングアーツを取り入れながら多様性があふれる芸術文化活動を行います。これまで把握できていなかった障がい者アーティストの調査・発掘にも注力。アートマネジメントプログラムの一環として、実習受講生の人材育成も図ります。相談支援、研修会、地域のイベントへの参加、展示会などを実施し、すそ野を広げ、理解者を増やしていきます。

今年度事業の成果

「こみっとあーとアトリエ」は多数の参加者から好評を得ることができ、今後継続できるノウハウが蓄積されるとともに、人材育成につながりました。「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」の事業として展示会や即興劇などを実施する団体もあります。一過性のイベントではなく、次年度につながる取り組みの基軸とな

り、すそ野を広げています。今回未実施だった団体が希望して手を上げてくれるなど、ネットワークの輪も広がりがつあります。またインプロと呼ばれる即興劇にトライした施設では今回のノウハウを活かし、来年度から毎月実施することが決定しています。

取り組み紹介

「こみっとあーとアトリエ」

日程 | 2017年9月～2018年1月、月1回開催
会場 | 別府発達医療センター、清流会、九州キリスト教社会福祉事業団、県南福祉会、すぎのこ村Beeすけっと ほか

取り組みのねらい

障がいのある人たちによる自由な創造活動を支援する場として立ち上げました。障がい者への芸術文化活動的支援ができる人材育成プログラムづくり、アトリエ活動を通じて関係者のネットワーク構築、従来把握で

きていなかった障がい者アーティストの調査・発掘も行いました。絵画のみならず、音楽や即興劇など多様性のある芸術文化活動を行うことを念頭に取り組みました。

実施内容

県内を4つのブロックに分けて、「こみっとあーとアトリエ」を開催。「別府発達医療センター」(中部地区)では4回、「清流会」(県北地区)では2回、「九州キリスト教社会福祉事業団」(県北地区)では2回、「県南福祉会」(県南地区)では4回、「すぎのこ村Beeすけっと」(県西地区)では4回、絵画・造形・即興劇・音楽の4ジャンルに分けた

プログラムを実施しました。精神科病院の長期入院者には、病院と連携して音楽による出張アトリエを実施しました。人材育成のためのアートマネジメント実習も同時開催。福祉や教育関係者を中心に、支援について幅広く学べる場を設けました。アトリエ活動で創作された作品や発掘した作品の展示会を開催しました。



左上 | こみっとあーとアトリエ案内 左下 | 展示紹介記事 右上2点 | アトリエ活動 右下 | 展示会場の様子

成果

どの会場でも参加者・受講者から好評を得ることができました。アトリエで創作された作品は全体の展示会以外に、それぞれの地域でのイベントにも出品しました。今後はノウハウを活かし、それぞれの事業所独自

の継続的な取り組みが行われる予定です。18年度開催の「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」に紐づくプログラムとして行われるものなど、支援体制の構築が進んでいます。

鹿児島県

鹿児島県アールブリュットネットワーク協議会

かごしまアールブリュットセンター

〒890-0014 鹿児島県鹿児島市草牟田1-8-7(社会福祉法人ゆうかり内)
TEL: 099-813-7183 FAX: 099-813-7176 MAIL: kyoten@yuukari-s.jp URL: http://yuukari-s.jp

実施団体

社会福祉法人 ゆうかり

実施団体概要

障害福祉サービス（施設入所支援、生活介護、就労移行支援、就労継続支援AおよびB型、短期入所、日中一時支援、相談支援、グループホーム）と保育園・放課後等デイサービスを展開しており、2017（平成29）年で創立50周年を迎えました。「あなたの笑顔はみんなをHAPPYにする!」を基本理念に掲げ、誰もが明るく朗らかな笑顔をつたえ、意欲と自信を持って、より豊かな人生を送ることができるよう総合的な福祉サービスを提供しています。17年には、鹿児島市障害者地域生活支援拠点「ゆうかり」を開設。鹿児島市基幹相談支援センターと連携した安心コールセンター、短期入所、共同生活援助、相談支援、通所施設を備えた拠点となっています。

都道府県の現状と課題

県の障害者芸術文化活動普及支援に関する最大の課題は周知度にあると考えられます。15(平成27)年度「第15回全国障害者芸術・文化祭かごしま大会」開催以降、障害者芸術文化に関連した大きな活動や事業が行われていません。一般の県民にとっては障害者の芸術活動に触れる機会がほとんどなく、単発的なイベント

だけでは十分な理解を得ること、定着させることは極めて困難です。そのようななかで作家や作品の発掘も思うように進んでいません。この課題は、1法人や1団体で解決できる問題ではなく、地道にネットワークをつくり、小規模な取り組みを繰り返して、拡大していく必要があるものと考えました。

今年度の取り組み概要とねらい

協力委員会検討会議を3回開催し、12月10日にバリアフリー映画上映会、1月21日～30日に「かごしまアールブリュットセンター開設記念 あなたの色、わたしの心展」を地域生活支援拠点「ゆうかり」にて開催し、併せて1月21日に弁護士の上山幸正氏による講演「障害のある方々の創作活動にまつわる権利を守る」、社会福祉法人愛成会副理事長の小林瑞恵氏によるトーク

「『2017ジャパン×ナントプロジェクト』『KOMOREBI展』について」、1月28日にアートディレクターの井上多枝子氏によるギャラリートークを実施。「かごしまアールブリュットセンター」開設を周知すること、そして障害者芸術の現状や動向に興味を持ってもらうことをねらいとしました。

今年度事業の成果

バリアフリー映画上映会においては、近隣の視覚障害、聴覚障害の方々にお越しいただき、支援機器「UDCast」を利用した映画鑑賞、今後の上映会のための意見交換などを実施しました。展覧会「あなたの色、わたしの心展」ではのべ300人が来場。「初めて観たが、素晴らしかった」「もっといろんな方々に観てほしい」といった声が聞かれ、微力ながら周知活動になっ

たのではないかと考えています。同時開催した「障害のある方々の創作活動にまつわる権利を守る」『2017ジャパン×ナントプロジェクト』『KOMOREBI展』についての研修活動には、近隣の特別支援学校の教諭にも参加してもらうなど、ネットワーク形成の一助となりました。



取り組み紹介

「かごしまアールブリュットセンター開設記念 あなたの色、わたしの心展」

日程 | 2018年1月21日(日)～30日(火) 会場 | 地域生活支援拠点「ゆうかり」

取り組みのねらい

「かごしまアールブリュットセンター」が開設したことの周知と、障害者の芸術作品を広く一般の人たちに観ていただくことを大きな目的とし、研修やギャラリートーク

クにより、障害者芸術の現状や動向に興味を持ってもらうことをねらいとしました。

実施内容

出展作家(敬称略)は上山滉平(鹿児島大学附属特別支援学校)、内村允哉(鹿児島大学附属特別支援学校)、富山健二(社会福祉法人富士福祉会)、西之原清香(社会福祉法人富士福祉会)、川畑豪大(社会福祉法人落穂会)、清隆浩(社会福祉法人落穂会)、西園優子(社会福祉法人ゆうかり)、山平浩介(社会福祉法人ゆうかり)、神渡一郎(社会福祉法人ゆうかり)、鶴田幹夫(社会福祉法人ゆうかり)の

11人。オープニングトークとして弁護士の上山幸正氏による「障害のある方々の創作活動にまつわる権利を守る」、社会福祉法人愛成会副理事長の小林瑞恵氏による「『2017ジャパン×ナントプロジェクト』『KOMOREBI展』について」の2講演会を開催したほか、アートディレクターの井上多枝子氏をお招きしてギャラリートークも開催しました。



左 | チラシ表面 右 | 会場およびギャラリートークの様子



成果

来場者数はのべ300人。なかには、鑑賞された翌日に知人を連れてきてくださる方もいました。アンケートもおおむね好評で、「いろいろな作品を観てみたい」「もっといろんな人に観てもらいたい」といったご意見をいた

だきました。また作品の選出や設営、説明・案内パネルの制作などについて、ギャラリートークを行った井上氏に全面的に協力していただき、展示の技術なども学ぶことができました。

北海道・北東北ブロック+宮城県



北海道アールブリュットネットワーク協議会

アールブリュット推進センターGently

〒061-0231 北海道石狩郡当別町六軒町70-18

TEL: 0133-22-2896 FAX: 0133-23-0811 MAIL: yuyu.artbrut@gmail.com URL: http://gently-artbrut.com/

実施団体

社会福祉法人 ゆうゆう

実施団体概要

地域としっかりと手を組み「地域をつくる」ことをめざして、住民同士が支え合う仕組みづくりを提案・模索し続けてきました。制度を超えたインフォーマルな支え合いの仕組みづくりや包括的な相談支援体制の構築など、従来の枠組みにとられない活動実践を通して「福祉はクリエイティブ」を提唱しています。「ゆうゆう」を核として北海道内の障害福祉に取り組む10団体が手を携え、2015（平成27）年に発足した「北海道アールブリュットネットワーク協議会」には、弁護士や学芸員、大学教員も加わり、賛同者を増やしながらか、広域の北海道を網羅した幅広い視点からの障害者の芸術文化活動相談支援に取り組んでいます。

ブロックの現状と課題

北海道・北東北ブロックの対象地域は北海道、青森県、秋田県、岩手県、そして宮城県の5道県でした。北海道は「障害者の芸術活動支援モデル事業」に取り組んでいたところから広域ネットワークでの活動経験があったので、今年度のブロック連携のモデルとしました。北海道においては協議会活動が3年目に突入し、各圏域に中心となる事業所もできていて、自主的な活動が広が

り、懸念の人材育成も自主運営を通じて実現できています。課題は広域の情報一元化の困難さで、事務局の情報収集・発信機能の強化が必要です。北東北エリアを見ると、実績ある各県団体がそれぞれユニークな取り組みをしており、今回のブロック連携にあたり、県を越えた人的ネットワークをつくることを主な目的とし、全道県での情報共有を課題としました。

今年度の取り組み概要とねらい

当ブロックは、「障害者の芸術活動支援モデル事業」に取り組んできた実績を持つ団体がある北海道、秋田県、宮城県、今年度事業初実施の青森県、支援センターのない岩手県と、3層に分かれた構造となりました。ブロック全体で事業の実施ができる体制を取るため、まず実施団体がいない岩手県の情報を収集しました。県内でもっとも実績があると思われた「るんびにい

美術館」に協議会のネットワークを通じ、事業主旨を伝え、理解を得た上で協力の快諾をいただきました。その後、全県でのブロック目標策定研修を経て、訪問による現状把握を行い、北海道での広域活動経験を活かした連携を模索し、ブロック事務局として受益者ニーズを探りながら進める方針としました。

今年度事業の成果

ブロック内の未実施県が岩手県のみのため、まず岩手県の協力団体を決定し、全県態勢を整えました。その後、行動計画を策定するための現況報告・宿泊研修を岩手県の施設で実施。実施、未実施を問わず「顔の見える」関係構築をめざしました。宿泊研修で関係性をつくり、すぐさま各県の実施団体を訪問。直接取材を通して各団体の強みの把握に努めました。現状に即し

て柔軟に対応しながら、全体の合意事項としてブロック合同展示会およびブロック連絡会議を、開催県を移しながら、各3回開催でき、一体感を醸成することができました。また、ギャラリートークにより各県の状況を発信、研修の場とし、支援者向けのワークショップも開催することができました。

取り組み紹介

「北海道・北東北 アール・ブリュット展 ブロック展」

日程 | 2017年11月29日(水)～12月3日(日)、12月21日(木)～26日(火)、2018年1月16日(火)～21日(日)

会場 | 青森県立美術館、函館市芸術ホール、ギャラリー大通美術館 ほか

取り組みのねらい

ブロック内連携の具体化、ノウハウの域内共有、一体感醸成、さらに支援センターを今年度から設置した青森

県の取り組みの充実という複数のねらいから、ブロック合同展示会を開催しました。

実施内容

青森県を皮切りに海を越えて北海道函館市でも開催。さらに北海道では「障害者の芸術活動支援モデル事業」時代から恒例となっている札幌市にも巡回しました。特に、初の取り組みとなる青森県では、障害者芸術の説明の際に、ブロック各県の多種多様な作品群を市民や関係者に直接観ていただけたことは、意義が深いように思いました。札幌市では、多彩な展示に加え、

ギャラリートークで各県の特徴ある事例発表や岩手県の「るんびにい美術館」で20年にわたり蓄積された独自のノウハウを体験的に伝えるワークショップを開催できました。この展示会と同時に、青森県と札幌市ではブロック連携会議も開催。研究者や学生といったオブザーバーの参加もあり、さまざまな質問や意見が飛び交う情報共有の場となっていました。



左 | 展示風景（青森） 右上 | ギャラリートーク（北海道） 右下 | 第1回ブロック連携会議（岩手）

成果

出展数は各展約300点、来場者数は合計で約2000人でした。出展準備は手間がかかりますが、だからこそブロック各県をつなぐ役割を果たします。展示作業には各事業所メンバーに加え、学生や研究者、市民も加わりました。同時開催したブロック連携会議も会場の熱

気を持ったまま開催できました。展示会やマスコミ取材を通じて、障害への理解や多様な芸術のあり方など目に見える情報発信、魅力発信の効果がありました。会場ではもはや芸術の一分野だとの声も多く聞かれ、事業実施により理解が進んでいることを実感できました。

南関東・甲信ブロック+栃木県



東京アール・ブリュットサポートセンターRights

〒164-0001 東京都中野区中野5-26-18
TEL: 03-5942-7251 FAX: 03-3387-0820 MAIL: rights@aisei.or.jp URL: http://brut.tokyo

実施団体

社会福祉法人 愛成会

実施団体概要

1958 (昭和33) 年に創立して以来、障害のある方々の望む生活の実現に努めてきました。2010 (平成22) 年に入所施設を建て替え、すべて個室化してプライバシー重視の生活を提案しています。利用者とともにまちづくりに寄与することをめざし、障害のある方々の創作活動の支援や発信を行ってきました。04 (平成16) 年には地域で暮らす障害のある方々の創作の場として「アトリエ pangaea (ぱんげあ)」を創立、10年からは中野区内の商店街や地域住民と協働で芸術文化活動の発信に取り組んでいます。14 (平成26) 年より3年間「障害者の芸術活動支援モデル事業」の採択を受けて活動支援を行い、今年度より南関東・甲信ブロック1都6県の広域支援に取り組んでいます。

ブロックの現状と課題

当ブロックは1都6県で構成され、全域で約4000万人が暮らす人口集中エリアです。ブロック内には支援センターが5カ所あり、そのうち、今年度新設のセンターが2カ所、支援センター不在の自治体が2県(長野県、千葉県)あります。障害のある方々の芸術文化活動支援で長い経験があるものの、舞台芸術分野のノウハウ不足や担当全域での活動におよんでいないことに課題を感じ

ている支援センターが複数ありました。未実施の2県の現状は次の通りです。千葉県では活動の盛んな団体が複数ありますが、個別の活動に留まっており、県内ネットワーク構築に課題を感じています。長野県では「長野オリンピック」以降、障害者の芸術活動が連綿と続いており、普及支援事業への関心も高いことがうかがえました。

今年度の取り組み概要とねらい

「人材育成」「ブロック内ネットワーク構築」「普及支援事業」未実施県での活動の把握」を取り組みの柱としました。「人材育成」では、支援センターに向けた研修と事業未実施の長野県で創作支援・権利保護などに関する総合的な研修を実施し、障害のある方々の芸術文化活動の支援者育成を目的としました。「ブロック内ネット

ワーク構築」では、連絡会議を複数回開催し、各センターのそれぞれの取り組みや実施における課題を共有しました。「未実施県での活動の把握」では、活動や支援における課題、潜在的ニーズの把握を目的に、各県担当者協力の下、障害のある方々の芸術文化活動について同県内の状況聴取やアンケートを実施しました。

今年度事業の成果

人材育成では、支援センターを対象に鑑賞支援や作品の二次利用について専門家から学ぶ機会を設けた結果、「情報保障の必要性を感じた」「相談事業運営に役立つ」という声がありました。未実施県での研修では意欲的な意見が目立ち、事業拡充の機運を感じています。ブロック連絡会議では、回を追うごとに出席者の距離が近づき、課題共有や解決方法を議論して理解を深めたことで、今後の普及支援の動きに役立つことが

期待できます。広域センターとして支援センター間のつながりを構築するという重要な働きができたと感じています。未実施県での調査は、「芸術活動支援に関するスキル不安」「芸術鑑賞のハード・ソフト両面でのサポートの必要性」といったニーズの把握につながり、今後の研修プログラムや文化施設での鑑賞支援に対する有用な情報を得られたことは、芸術文化活動の広がりの一助になると考えます。

取り組み紹介

「ブロック連絡会議」

日程 | 2017年9月20日(火)、11月15日(火)、2018年1月17日(火)
会場 | ターナーギャラリー、愛成会メイプルガーデン

取り組みのねらい

各支援センターが集まり、課題や実施状況を共有し、意見交換を行う場として、9月、11月、1月と全3回のブロック連絡会議を開催しました。課題解決や計画内容の向

上または新たな展開につながるヒントを見つける場となること、ブロック内でのネットワーク構築の場となることを目的としました。

実施内容

初回は各センターの核となる法人の紹介と法人が所在する各自治体の現状と課題、今年度の計画内容について発表。第2回は「美術」と「舞台芸術」に分かれ、各団体の特徴となる取り組み内容について発表し、意見交換を行いました。第3回は舞台芸術活動支援に焦点を絞り、連携事務局の鈴木京子氏(ビッグ・アイ事業プロ

デューサー)に参加いただき、各センターの課題や疑問に対して全国の取り組み事例をもとに解決案やそれにつながる情報を集める機会としました。全3回ともに各々が必要な情報を収集できるよう、今年度の活動について各センターの方々にお話しいただく時間を多く設け、課題解決に向けた意見交換を中心に行いました。



左 | 第3回ブロック連絡会議 右上 | 第2回美術チームディスカッション 右下 | 第2回ディスカッションメモ

成果

定期的な連絡会議の開催により、当初にねらいとして掲げた内容のほか、各地域での試みや成功例など多くの情報を共有することで、センター育成につながる場になったと感じています。特に今年度新設のセンターにとっては、他県の状況や実施内容を知ること、「自分たちでは気づけなかった事業の特徴や自分たちの地域の状況などについて再認識する機会になった」との声

もいただきました。また、ブロック内で同事業を実施する団体間で定期的に集う場になり、各センターの得意分野を互いに認識できる機会になったと感じます。今後も継続することで各種支援における情報の充実やノウハウの蓄積だけでなく、ブロック内支援センター間の連携体制の構築によるブロック全体の活性化につながると考えています。

東海・北陸ブロック



障害者芸術文化活動広域支援センター

〒943-0834 新潟県上越市西城町2-10-25 大島ビル3階307号室
TEL: 025-530-7264 FAX: 025-530-7261 MAIL: info@niigata-artbrut.net URL: http://niigata-artbrut.net/

実施団体

社会福祉法人 みんなでいきる

実施団体概要

高齢福祉事業を展開していた「桃林福祉会」と障害福祉事業を展開していた「りとるらいふ」が合併し、2014（平成26）年に「社会福祉法人みんなでいきる」が誕生しました。法人名を理念に掲げ、福祉事業を展開しています。また今年度より児童養護施設の運営も開始しました。障害のある方の創作活動の支援は「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」の採択を受けたことを機に、相談窓口の設置、アーティストの発掘や人材育成事業、展覧会開催などに取り組んできました。「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」におけるブロック圏域の事業の採択を受け、東海・北陸ブロック8県を対象に巡回やブロック内の作品を集めた展示会の開催など、広域的な取り組みを行っています。

ブロックの現状と課題

全8県で構成される東海・北陸ブロック。日本列島のほぼ中央に位置し、日本海から太平洋側まで縦断しているほか、東北・関東・関西地域に接する多様性に満ちた地域です。「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」の支援センターが設置されている自治体は愛知県のみで、ブロック内の実施団体による情報交換や連

携した事業の実施は困難な状況でした。当センターは、ブロック内の自治体や関係団体とのつながりに乏しく、各県の情報をほとんど持っていませんでしたので、まずはブロック内の自治体をはじめとした関係機関との信頼関係を築き、各県における現状を把握し、必要な事業を検討することが肝要でした。

今年度の取り組み概要とねらい

8県を、できうる限り巡回することを事業の主軸としました。ねらいは、障害のある方の創作活動を推進する上で、必要となる情報の提供や事業の企画とともに実施してくれる各県のカウンターパートを見つけることでした。特に今年度は8県のうち7県が「障害者芸術文化活動普及支援事業」を未実施であり、来年度以降の実

施に向けて各県の行政担当者との協議が必要でした。事業開始直後の17（平成29）年7月～8月を巡回の重点期間とし、ブロック内の相談窓口を開設したことと事業の概要を各県行政担当者に説明しました。当センターが拠点を置く新潟県を併せ、年間で計30回の巡回訪問を行いました。

今年度事業の成果

巡回訪問にあたって、各県の行政担当者に非常に熱心に話を聞いてもらえました。すでに「障害者芸術文化活動普及支援事業」の内容も把握されており、来年度以降の事業実施に向けても前向きな話をいただき、実際に事業に取り組む自治体もいくつかあります。次年度はよりブロック内における連携や情報共有が円滑になる

ことが期待できます。また、巡回を通じて各地域の団体と知り合い、富山県では協働の展覧会、福井県ではセミナーを開催することができ、活発な意見交換ができました。このことを通じて、各県で必要としている事業と一緒に考え、支援していくことが広域センターの役割だと実感しました。

取り組み紹介

「障害者芸術文化活動普及支援事業未実施県への働きかけ」

日程 | 2017（平成29）年度を通じて

取り組みのねらい

巡回訪問を通じて、各県の状況が徐々に浮き彫りになり、また事業未実施県が実施に向けて特に求めていることが、年間スケジュールと実務内容の把握であることがわかりました。それにより、実務を伝える場が必要と考え、実地研修を実施しました。支援センターを開設す

ることが目的ではなく、開設後にしっかりと実務を通じて役割を果たすことが重要です。当センターが実際に取り組んできた相談支援や研修会、戸惑ったことや失敗事例などを伝達し、情報交換を行いました。

実施内容

2日間にわたり、実務を伝える時間を設けました。「障害者芸術文化活動普及支援事業」の要である相談支援を中心に、協力委員会の機能や参加型展示会を開催する意義、創作活動にかかわる権利保護の研修会、17年度より実施している舞台芸術の取り組み状況などを事例に基づき説明しました。プログラム終了ごとに情報交換を行い、当センターの取り組みをもとに、各県で

どのような運営ができるかを協議しました。特に相談窓口が明確になることによって、個別なものから団体間のもので、時には福祉の文脈を超えたさまざまな相談が届いていることを伝達しました。受け止めた相談の一つひとつ丁寧に対応していくことで、障害のある方の創作活動がより広がっていくことを伝えました。



左 | 静岡県における実地研修 右 | 実施要綱

実地研修内容

- 〈1日目〉
 - 支援センターの全体像
 - 相談支援の意義と実績
 - 協力委員会の機能
 - 創作活動に係る権利擁護
 - 相談支援における実際の事例
- 〈2日目〉
 - 参加型展示会の開催に向けて
 - 人材育成事業の企画
 - 舞台芸術活動の推進
 - 調査・発掘・評価・発信事業の進め方
 - 展示会の空間デザイン
 - 事務処理等に係る実務報告

成果

次年度に向けて、実際の「障害者芸術文化活動普及支援事業」の内容や取り組む意義、事前の準備事項を伝えることができました。18（平成30）年度の支援センター開設と実働が円滑になると思います。当センターとしても、事例を教えてもらうなど学びの多い2日間でした。巡回などを通じて各県の担当者と事前に顔を交えて話をする機会があったため、コミュニケーションがと

りやすかったことも大きな成果です。この事業の必要性や内容を一律に伝えても、地域差や個々の課題があるため伝わらないことがあります。各県の状況に応じて相談に応えられる専門性と気軽に相談できる信頼関係を、広域センターとして身につけていく必要性を感じました。

連携事務局の 取り組み

「障害者芸術文化活動普及支援事業」では、「障害者芸術文化活動支援センター」(支援センター)、「障害者芸術文化活動広域支援センター」(広域センター)をさらに横断的に支援する事務局(連携事務局)が設置されました。2017(平成29)年度は、美術分野を社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～、舞台芸術分野を社会福祉法人大阪障害者自立支援協会が担いました。ここでは、連携事務局の本年度の取り組みと、未来への展望について紹介します。

全国連絡会議

連携事務局 | グロー（美術） 大阪障害者自立支援協会（舞台芸術）

全国の支援センターが一堂に会して、それぞれの不安や課題を共有する第1回全国連絡会議を9月に実施しました。全国連絡会議は当初、広域センターのみを集めて実施する予定でした。しかし広域センター不在のブロックも複数あること、今年度より新たに支援センターを立ち上げる団体も多かったことなどもあり、新規団体にとっては厚生労働省の担当者やモデル事業から取り組んでいる支援センターの担当者とも顔を合わせる貴重な機会となりました。また、その後の事業運営にとっても大変意義深い会議となったようです。

第2回は広域センターと連携事務局が集まり、2018(平成30)年1月に実施し、現状報告や事務連絡などを行いました。

第1回の成果を踏まえて3月にも再び全国の支援センターおよび広域センターが集う機会を設け、事業の成果と課題を振り返る機会として第3回の会議を開催しました。その際、今後の全国における取り組みに有効となる合同研修も実施しました。

ここでは、全国の支援センター、広域センターが集った第1回と第3回の全国連絡会議について報告します。

第1回全国連絡会議

実施概要

日時 | 2017年9月26日(火)10:00～16:00 会場 | 国際障害者交流センター ビッグ・アイ 大研修室

参加者 | 58人 (内訳 | 支援センター20団体・30人 / 広域センター3団体・6人 / 連携事務局(美術・舞台芸術)・6人 事業実施11自治体・13人 / 厚生労働省・3人)

支援センターのほかにも、支援センターが設置されている都道府県の障害福祉や文化芸術の担当者などにもお声がけし、50人を超える参加者が大阪に集まりました。簡単な自己紹介とオリエンテーションのあと、グループワークを行いました。

グループワークの概要とねらい

グループワークは、美術分野4グループ、舞台芸術分野3グループの全7グループにて実施。モデル事業を実施してきた団体と今年度支援センターを立ち上げた団体がどちらも含まれるようにグループ分けを行い、ファシリテーターとして広域センターまたは連携事務局のメンバーを配置しました。それぞれに自己紹介とアイスブレイク(雰囲気や和ませ本編への流れをつくる)の後、「事業における不安や課題を書き出す」「それらの不安や課題に対する取り組みアイデアを考える」という2つのワークを行いました。ともに個人で考えて書き出す時間と、グループごとに共有し議論する時間を設けて、最後に発表してもらうことで内容を全体で共有しました。グループワークのねらいについては大きく以下の3つです。

- 1 それぞれの支援センターが抱える不安や課題を洗い出す。
- 2 見えてきた不安や課題の解決に向けた取り組みについて議論する。新規に支援センターを立ち上げた団体には、モデル事業実施団体がこれまでの経験などをもとにアドバイスする。
- 3 グループワークを通してほかの支援センターと交流する。それぞれの取り組みなどについて知り、今後、相談や講師の依頼などの連携ができるネットワークづくりの一助とする。



会場の様子



発表の様子

グループワークで出された課題とそれに対する取り組みアイデア

今年度から支援センターを立ち上げた団体や舞台芸術分野については、特に重点的に課題を出し合いました。地域の特性や支援センターの運営年数に応じて、さまざまな取り組みアイデアが出されました。ここでは、美術分野と舞台芸術分野それぞれのグループで挙げられた内容と、その両方に共通した内容に分類して、一部を紹介します。



あるグループの議論をまとめた横造紙

美術	舞台芸術	美術・舞台芸術共通
<p>課題 事業所の活動にもっと芸術文化関係者に参加してほしい。</p> <p>アイデア 研修や講座をきっかけとしてアーティストが参加できる仕組みづくり。</p>	<p>課題 舞台芸術や音楽の専門性やノウハウのある指導者がいない。</p> <p>アイデア 障害者舞台芸術学校の設立。若い世代(学生など)との協働。</p>	<p>課題 イベントや研修への集客。</p> <p>アイデア マスメディアの活用(地元新聞で取り上げてもらった時の反響がもっとも大きい)。会場へのアクセスなど、バリアフリーに関する情報をチラシなどに掲載してはどうか。</p>
<p>課題 相談支援のための県内ネットワークの構築。</p> <p>アイデア 自立支援協議会の部会で課題として提案してみる。〇〇協会のように組織化を図る。</p>	<p>課題 障害のある表現者の発掘。</p> <p>アイデア 全県的な調査の実施。</p>	<p>課題 障害者の芸術活動を発表できる機会が少ない。</p> <p>アイデア 地域の文化祭などでも障害のある人の作品を展示してもらう。</p>
<p>課題 作品の保管や所蔵。</p> <p>アイデア 作品取り扱い規定の整備。</p>	<p>課題 予算の不足。</p> <p>アイデア 助成金や補助金、協賛金の調達(そのための研修)。小さな資金でできる取り組みの検討。</p>	<p>課題 過疎地域は制作環境が少ない。</p> <p>アイデア 移動アトリエやワークショップの実施など。</p>
<p>課題 どうしたら福祉やアート以外の人を巻き込めるか。</p> <p>アイデア 地域の飲食店や商店街など身近な場所での展示。展示会やセミナーをほかのイベントと同時開催して、作品を観てもらえる機会をつくる。</p>	<p>課題 支援センターとしてどうかかわっていいか(中間支援のあり方)がわからない。</p> <p>アイデア 連絡会議(勉強会)で議論する。</p>	<p>課題 作品をどのように評価するか。</p> <p>アイデア (具体的なアイデアは挙がらず)</p>
<p>課題 支援人材不足。支援人材育成がなかなか進まない。</p> <p>アイデア 大学生やアーティストなど、募集の窓口を広くする。一朝一夕にはいかないもの。地道に研修を重ねる。</p>	<p>課題 事業実施期間が短い。</p> <p>アイデア 単年度の成果を求めすぎない。</p>	<p>課題 鑑賞支援に関しての知識がない。</p> <p>アイデア すでに取り組んでいるところからの情報収集。連携事務局に相談する。</p>
<p>課題 自治体ごとの支援体制に温度差がある。</p> <p>アイデア 熱心な地域の情報をそうでない地域に提供する。</p>	<p>課題 参加者のためのアクセスの確保。</p> <p>アイデア 福祉計画に位置付けて移動支援を利用する。アクセスコーディネーターなどの人材育成。</p>	

第3回全国連絡会議

実施概要

日時|2018年3月9日(金) 11:00~17:30

会場|厚生労働省 17階8号室(専用第20会議室)

参加者|36人(内訳|支援センター17団体・24人/広域センター3団体・4人
連携事務局(美術・舞台芸術)・6人/厚生労働省・2人)

前半の2時間で今年度取り組んだ事業の成果と課題について振り返るグループワークを行いました。後半は、日本ファンドレイジング協会事務局長の鴨崎貴泰氏をお迎えし、「社会的インパクト評価ロジックモデル構築研修」と題した講演とワークショップを実施しました。

グループワークの概要とねらい

グループワークは、第1回と同様にモデル事業を実施してきた団体と今年度新たに支援センターを立ち上げた団体の混成による6グループで実施しました(美術分野、舞台芸術分野には分けて)。グループごとに簡単な自己紹介を行った後、「年度当初の課題にどのように向き合ったかを振り返る」「事業を実施するなかで〈支援センターがあってよかった〉〈普及支援事業をやっていたよかった〉と思えるエピソードを共有し、意見交換を行う」の2つのワークを行いました。グループワークのねらいについては大きく以下の3つです。

- 1 事業当初の課題について振り返る。
- 2 支援センターや普及支援事業の意義・有用性について身近なエピソードから考える。
- 3 グループワークを通してほかの支援センターと交流する。
同じような悩みを抱える仲間として、相談し合える関係(=ネットワーク)をつくる。

グループワーク1 | 年度当初の課題を振り返る

年度当初に悩んでいたことや課題がどのようなものだったか、その課題にどのように向き合い解消してきたか、またどんなことが課題として残っているかを各人が振り返り、グループで共有しました。

年度当初の課題	その解決・解消のために取り組んだこと	うまくいったこと・苦勞した(している)こと
タイトなスケジュールのなかで事業数が多い。	担当者を分野ごとに振り分け、セミナーなどは連続性をもたせて一連の事業としてスケジュールリングした。	スケジュールの調整には苦勞した(している)。
新たに支援センターを立ち上げるが相談はあるか。	リーフレットを作成し、調査の時に説明、周知を図った。	相談件数は伸び悩んでいるが、センターの存在は着実に浸透してきている。
支援センター人材(相談や研修の新たな担当者)の育成。	過去に作成した報告書をマニュアルとしてレクチャー。OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング 実務を通じたトレーニング)を実施した。	途中担当者が変わることもあったが、順調に経験が積まれている。
新たに舞台芸術分野の活動に取り組むこと。	協力委員会の構成員を変更した。また事務局以外のチームビルディング(演出、制作、舞台美術、ほかスタッフ)と定例会議の実施。	まったく異なる芸術活動のコミュニティとなりが、障害のある人の表現領域や支援者を増やしていった。ただし、単年度ではまだまだ成果が見えにくい。

グループワーク2 | 支援センターや普及支援事業の意義・有用性を考える

ワールドカフェ形式(各参加者が対話を通じて「気づき」を得ることを目的とする議論の手法で、短時間で席替えを行いながらより多くの参加者と対話を重ねる)を採用し、障害者の芸術文化活動やその普及を支援するこの事業について、具体的なエピソードを共有しながら支援センターの役割や意義を振り返り、事業の有用性について語り合う機会としました。



ワールドカフェの様子

エピソード

特別支援学校の教員や福祉施設の職員が互いに取り組みを共有することで、作家の力を引き出す工夫について気づきがあった。

支援者にとって「上手に描かせる」から「本人の良さを引き出す」への価値転換のきっかけとなった。

2年前に相談を受けてつないだことが大きく発展した。この事業で行ったワークショップで生まれた作品が全国3カ所を巡回し、それがきっかけとなって国立新美術館でも展示されることになった。

まだ活躍のサイクルにつなげていない障害のある人が、自分の可能性を引き出す人に出会えた。

今回の事業を通じて知り合った障害のある人の家族同士が仲良くなり、「旅」型の研修をすることにした。本人や家族にとって、旅先でのリフレッシュと創作へのインスピレーションが得られた。

社会的インパクト評価ロジックモデル構築研修

講師の日本ファンドレイジング協会事務局長の鴨崎貴泰氏に、社会的インパクト評価についてお話しいただきました。同評価が求められるようになってきた社会的な背景や、世界や日本における動向についての紹介に始まり、具体的な評価の手順や方法について解説がありました。

社会的インパクト評価では、事業によって得たいアウトカム(長期・短期の成果)を設定し、そのために必要なアウトプット(事業の成果物・事業量)を洗い出します。そして、そのアウトプットが自分たちの取り組んでいる活動やインプット(リソース)と乖離していないかを検証します。研修の後半には、グループに分かれて(支援センター5グループ/広域センターおよび連携事務局各1グループ)、このロジックモデルの構築を体験しました。グループごとにアウトカムの設定が異なっていたため、それぞれ特徴のあるモデルが構築されました。実際に体験することで、設定したアウトカムに対して活動が伴っていなかった、リソースが不足しているなどのことに気づく機会となりました。



グループの発表にコメントをする鴨崎氏

このロジックモデルは、事業スタート時点で構築し、それをもとに必要なデータを洗い出して実施期間中に収集・測定を行うものです。次年度以降、都道府県主体の事業となれば求められるアウトカムも大きく異なってくるため、それぞれに適正なロジックモデルを構築し、それに基づいた評価が必要となるでしょう。今回の研修を活かして、次年度以降さらに大きな成果を上げられる事業の実施につながる有意義な研修となりました。



あるグループのロジックモデル

広域センター不在ブロックのフォロー

今年度の事業においては、全国7ブロックのうち、広域センターが設置されたのは、3つの地域でした。設置されなかった南東北・北関東、近畿、中国・四国、九州の4つのブロックについては、広域センターや連携事務局がそれらのブロックにおける業務をフォローしました。

南東北・北関東ブロックに所在する宮城県、栃木県の支援センターは、それぞれ北海道・北東北ブロック、南関東・甲信ブロックのブロック事業に参加しました。

近畿、九州のブロックについては、連携事務局がブロック連絡会議を開催し、中国・四国ブロックに所在する広島県の支援センターについては、近畿のブロック連絡会議に参加してもらいました。このブロック連絡会議については、近隣の支援センターの取り組みを知り、事業を実施するなかで互いに相談し合えるような関係（ネットワーク）をつくることを目的としました。

また、支援センターが設置されていない27の自治体における障害者の芸術文化活動支援の現状を把握し、2018（平成30）年度以降には、本事業をさらに多くの自治体で実施することをめざし、事業説明会を開催しました。

そのほか、連携事務局では、広域センター不在のブロックにおいて、支援センターの相談対応、人材育成研修の企画・運営に関するアドバイス、講師派遣の支援、調査方法や字幕表示方法に関するアドバイスなど、支援センターの事業に関する個別の支援を行いました。

ここでは、連携事務局が主催した近畿、九州ブロックの連絡会議および未実施自治体向けの事業説明会について報告します。

九州ブロック連絡会議

実施概要

日時 | 2017年11月20日（月）13:30～16:30

会場 | TKP博多駅筑紫口ビジネスセンター803

参加者 | 18人（内訳|九州ブロックの支援センター6団体・7人／連携事務局（美術・舞台芸術）6人
事業実施3自治体・4人／厚生労働省・1人）

九州ブロックでは、宮崎県と沖縄県を除く6県で支援センターが設置されています（うち5県が今年度に立ち上げ）。それぞれの支援センターが取り組み紹介をした後、厚生労働省や連携事務局への質問や相談も含め、意見交換の時間を十分に設けました。それぞれの団体から、事業に取り組むなかでの課題や悩みについても発言があり、連携事務局は各地での事例を紹介しながら助言しました。また、厚生労働省からも多数問いかけがあり、各支援センターが現状の報告を行いました。



ブロック連絡会議の様子

近畿ブロック連絡会議

実施概要

日時 | 2017年12月20日（水）13:30～16:30

会場 | 近江八幡市勤労者福祉センター（アクティ近江八幡）研修室

参加者 | 25人（内訳|近畿ブロック（+広島県）の支援センター5団体・10人／広域センター3団体・3人
連携事務局（美術・舞台芸術）5人／事業実施5自治体・6人／厚生労働省・1人）

近畿ブロックの会議には、今年度初めて支援センターを立ち上げた和歌山県、モデル事業を3年間続けてきた奈良県、連携事務局も務める大阪府と滋賀県に、中国・四国ブロックから参加の広島県を加えた5府県の支援センターが集まりました。各支援センターから取り組み紹介がされた後、和歌山県の支援センターや新たに舞台芸術分野に取り組む広島県の支援センターからの質問や課題に答えることを中心に意見交換を行いました。特に協力委員会や評価委員会の位置付けやかかわり、取り組む舞台芸術の範囲（分野）などについて活発な議論がなされました。



ブロック連絡会議の様子

未実施自治体向けの事業説明会

実施概要

日時 | 2017年11月1日（水）13:30～16:00

会場 | 大阪国際交流センター 会議室1・2

参加者 | 26人（内訳|事業未実施13自治体・15人／事業実施1自治体・1人
連携事務局（美術・舞台芸術）6人／広域センター（東海・北陸ブロック）1人／厚生労働省・3人）

- ① 「厚生労働省における障害者の芸術文化活動支援について」（厚生労働省）
- ② 障害者芸術文化活動支援センターの取り組みについて
 - 「障害者の芸術活動支援モデル事業での取り組みについて」（連携事務局／美術分野）
 - 「障害のある人の舞台芸術活動に関する課題とニーズ」（連携事務局／舞台芸術分野）
 - 「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業の実施状況および東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターの活動状況について」（広域センター 東海・北陸ブロック）
- ③ 自治体からの現状報告

厚生労働省より本事業の仕組みを説明し、連携事務局と東海・北陸ブロック広域センターから、それぞれの役割および担当分野の状況に沿って、具体的な事業内容や事業の必要性、その成果について報告しました。

各自治体における障害者の芸術文化活動支援の現状について報告では、「実情が把握できていない」「活動が個別の取り組みに止まっており、地域全体への波及にいたっていない」「互いの事業をサポートし合えるネットワークの構築が必要」「支援者が不足している」「相談支援を行う体制が必要」などの課題が挙げられました。多くの自治体でニーズがあること、また本事業に類似した独自の取り組みも複数の自治体で行われていることがわかり、同時に来年度以降の事業についての質疑も多くいただきました。

自治体の担当者には、本事業についての理解を深めていただくとともに、関心を持っていただける機会となり、来年度以降の事業普及に向けて意義のある会となりました。



広域センターによる説明の様子



質疑応答の様子

障害者芸術文化活動普及支援事業 報告会 | 美術 |

今年度から始まった障害者芸術文化活動普及支援事業について、広域センターと連携事務局、厚生労働省が登壇し、事業の説明、全国の取り組みの報告を行った後、普及支援事業を全国47都道府県に広げていくための現状と課題、展望について議論しました。

概要

日時 | 2018年2月9日(金) 13:15~15:15 会場 | びわ湖大津プリンスホテルコンベンションホール淡海

登壇者

古城亜耶美(社会福祉法人 ゆうゆう) / 小川由香里(社会福祉法人 愛成会)
坂野健一郎(社会福祉法人 みんなでいきる) / 齋藤誠一(社会福祉法人 グロー)
鈴木京子(社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会)
大塚千枝(厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部企画課自立支援振興室)

進行 | 竹岡寛文(連携事務局・美術分野/社会福祉法人 グロー) 参加者 | 127人

冒頭に厚生労働省の大塚千枝氏から事業説明があり、今後の展開として「2019(平成31)年度には全都道府県で本事業を実施できるよう普及していきたい」との話がありました。その後、広域センターの3団体から、各ブロックについて、美術と舞台芸術の各連携事務局からそれぞれ今年度の取り組み状況を報告しました。それらの報告を受けて行った意見交換の様子をここにまとめています。

ブロック支援体制の導入

竹岡 | 今年、(社会福祉法人愛成会が)広域センターを担うようになってどのような相談が増えているか教えてくださいいただけますか。

小川 | モデル事業にかかわらなかった実施団体から、どのように事業を進めていけばいいかという相談をたくさんいただいています。

竹岡 | 未実施県への支援も、ブロックや連携事務局のすぐ重要な役割の一つです。ブロックで、実施県が非常に少ない東海・北陸ブロックから未実施県での取り組みについてご紹介いただけるでしょうか。

坂野 | (東海・北陸ブロックは)8県中7県が未実施県ですが、非常に先駆的な取り組みをされている団体も多い。富山県のアートNPO工房ココペリは、広域的に作

品を相互に貸し出し合ってネットワークのチャンネルをつくってこれられており、このブロック事業を進めていく上でも、代表の米田昌功先生のネットワークを活用させていただいています。新潟も未実施県ですが、県内の団体であるアートキャンプ新潟で「創作の場」を昨年4月から開催し、今は毎月1回行っていますが、40~50人ぐらい参加するようになっていきます。そこには障害のある方も来ているので、そういう場を求めている方は多いのだと思います。岐阜県の教育文化財団も、舞台芸術の鑑賞支援も含めた取り組みをされており、逆に教えてもらえることの方が多いいのではとワクワクしている状況です。

古城 | 北海道・北東北ブロックのなかで未実施県は岩手県ですが、花巻にある、るんびにい美術館は長年、東北で芸術活動支援や展示活動などを行っており、非常に心強いパートナーとして協力いただきました。出前授業として、支援者とアーティストである当事者の方が複数回一緒に小学校に出向き、作品の見方を語り合うなどの活動をされていて勉強になりました。

竹岡 | ブロック支援は今年から新たに始まった取り組みですが、合同で行うことで、新規の実施団体からもすごく好評を得たとうかがっています。

古城 | 今回ブロック事業として、青森、函館、札幌の3カ所で11月から1月にかけて「北海道・北東北アール・ブリュット展」の巡回を行いました。青森県の支援セン



トークディスカッションの様子

ターは今年度新設されたばかりで、展示のノウハウや作品借用のやりとりなど不安要素があったようなので、フォローする意味も込め巡回展という方法でブロック内の作品と一緒に展示することにしたわけです。展示の一連の作業のなかで実際のノウハウを共有でき、何より情報発信の機会を一緒につくり上げていくことで、この活動に対して青森県内での理解が深まるきっかけにもなったと聞き、私たちとしても非常にうれしいことでした。北海道教育大学岩見沢校の学生とも、次世代の担い手育成の一環と一緒に活動することができたので、双方にとってメリットがある形で事業を実施できました。

連携事務局と広域センターの役割

竹岡 | 今年取り組んでみて、都道府県の支援センターが求めていることや、未実施県が広域センターや連携事務局に期待していることなどを耳にする機会がありましたか。

坂野 | 東海・北陸ブロックでニーズを聞いていくと、展覧会や舞台公演のノウハウというよりも、事務局の実務的な部分や相談支援について学びたいという話が多くありました。そこで、2018年2月に2日間の実地研修を行うことを予定しています。

小川 | 南関東・甲信ブロックは、もともとすごく活発に活動している団体が多いので、事業を実施していくこと自体は特に苦労はないようです。しかし県の協力が思うように得られなかったり、協働できる人たちが地域で広がらないなど、人と人との関係性の部分で悩み

が出ていたように感じました。

古城 | 北海道・北東北ブロックでは、県によって取り組みの年数や経験などがさまざまなので、これから取り組みを始める団体に対しては伴走型の支援というか、一緒につかっていくような形が大変喜ばれました。すでにモデル事業の時から取り組まれている団体については、ブロックで一緒にやっていくということについて、発信力にメリットを見出せるような形で活動していくことが今後も求められるのではないかと感じています。

竹岡 | ブロックの取り組みが進んでいくなかで、連携事務局と広域セン

ターの担当で役割分担も必要になってきていると思いますが、連携事務局としてはどのように考えていますか。

齋藤 | 美術分野も当然そういう要素を残しながらだと思えますが、舞台芸術分野については各エリアでネットワークを組みながら模索していく期間がもう少し必要になるのではないかと思います。この事業の目的は、大きくは、全国で支援センターが立ち上がっていくための機運をどうつくっていくか、中身についてもお互いが切磋琢磨していく仕組みをどう維持していくかということだと思っています。モデル事業初年度の会議で、「障害者の芸術文化はよく西高東低」という話があったことを思い出しましたが、今、支援センターの配置だけで言うという状況は徐々に解消されてきています。僕自身は、身近な地域に芸術文化に関して相談できる場所や参加できる機会があるという状況をどんどんつくっていかねばならないと思っています。そのために、広域センターは身近なエリアで具体的な事業の実施を通して機運を高めていく役割を担うのだらうと思います。また連携事務局は、広域センターが行っている事業成果の情報共有を図るということと、年に数回、全国の支援センターが一堂に会する場を設定していくような役割があるのだと思っています。

大塚 | モデル事業から普及支援事業になり、ブロックというエリアを設け、中間の取りまとめ役が入ると、モデル事業とは少し違う体制に

ブロック巡回展は、一緒に活動することによって各所にとってメリットがあった。——古城

有効だと確認できたことは非常に良かった。

大塚

ブロック単位が、顔と顔が見えるネットワークづくり

なりました。今年度は、実施団体も厚生労働省も手探りでこの事業を設計したところがあると思います。ブロック連絡会議に参加した時に、非常に良いと思ったのが、ブロック内の支援センターが、それぞれの取り組みを報告し合い、意見交換し合う場になったことと、九州と近畿のブロック会議の際には、自治体の担当者にも来ていただいて、事業の内容をしっかりと伝える機会がくれたことです。近隣の実施団体と連携できるのではないかとこの可能性が見えたり、自治体の方にとっても、ほかの県の取り組みを知って自分たちの県の取り組みの方向性を考えたりできるなど、すごくいい機会を提供できたのではないかと思います。ブロックという単位が、顔と顔が見えるようなネットワークづくりができる単位であると確認できたことは非常に良かったと思っています。

竹岡 | (大阪障害者自立支援協会からは) 全国の舞台芸術分野の連携事務局として、美術分野の取り組みとは違う部分や、ブロック支援、あるいは全国の連携で取り組んでこられたことをお話いただけますか。

鈴木 | 舞台芸術分野に関しては、モデル事業では取り組まれていなかったため「どのような支援センターをつくらないといけないのか」と採択された団体が悩んでいました。採択団体の担当者と一緒に協議したり、意見交換を行ってきたなかで、舞台芸術は技術的な専門家や

いろいろな分野の人たちが集まらないと事業を進めることが難しく、それを事業所の中だけで解決していくことは少しハードルが高いと感じました。未実施県に関しては、当法人では文化事業者からの相談が多く、未実施県の劇場にもアプローチしていったところ、島根県で視覚障害者のダンスワークショップが始まりました。ここに県の障害福祉課の方と一緒に伺い、県が運営している公共の文化施設の方とつないだ上で、今後連携していただき、舞台芸術と福祉の専門性を持った障害のある人の舞台芸術の活動を来年以降、島根県でも始めてもらえたらとお話ししてきました。

情報交換や成果の共有をもっと詳細に

竹岡 | 次年度以降、連携事務局が取り組むべきポイントや課題についてお話しいただけますか。

齋藤 | まずは個々の事業所や個人の活動を支えるセンターを第一に普及していかなければならないと思っています。厚生労働省だけではなく、広域センターや連携事務局として何ができるかということをもっとしっかり議論することが、支援センターを普及させていく側としては必要だと思っています。もう一つは、障害のある方に情報が届かないことで、参加意欲が向上しにくい状況があることも容易に想像できるので、そうした仕組みや環境をつくっていかなくてはと思います。情報交換や成果の共有をつぶさにできるような環境をつくっていただけると思います。



第2部トークディスカッション(上段左から 古城、大塚、坂野 下段左から 鈴木、齋藤、小川)

障害者芸術文化活動普及支援事業 報告会 | 舞台芸術 |

広域センターと支援センター、連携事務局、厚生労働省が集まり、各センターの活動報告とトークディスカッションを行いました。

概要

日時 | 2018年1月28日(日) 13:30~17:15

会場 | 国際障害者交流センター ビッグ・アイ

参加者 | 109人

第1部 | 活動報告「障害者の舞台芸術活動における普及支援について」

広域センターと支援センターが今年度の舞台芸術分野の活動を実演や映像を交えて紹介し、地域における舞台芸術活動に関する取り組みや情報、学びなどを共有しました。

報告者

社会福祉法人 ゆうゆう(北海道・北東北ブロック) / 北海道新篠津高等養護学校 演劇部 [実演]
社会福祉法人 愛成会(南関東・甲信ブロック) / 特定非営利活動法人 スローレーベル(神奈川県) [映像]
社会福祉法人 みんなでいきる(東海・北陸ブロック) / 特定非営利活動法人 アートキャンプ新潟 [映像]
一般財団法人 たんぼぼの家(奈良県) [映像] / 社会福祉法人 南高愛隣会(長崎県) [実演]
社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会(連携事務局・舞台芸術)

第2部 | トークディスカッション「障害者の舞台芸術活動に必要な支援とは」

「障害者の舞台芸術活動に必要な支援とは」をテーマにトークディスカッション。冒頭に厚生労働省の村山太郎氏から事業説明と2018(平成30)年度の展開について説明があった後、意見交換を行いました。ここでは、意見交換の内容を紹介します。

登壇者

坂野健一郎(社会福祉法人 みんなでいきる) / 近 守(特定非営利活動法人 アートキャンプ新潟)
野崎美樹(特定非営利活動法人 スローレーベル) / 岡部太郎(一般財団法人 たんぼぼの家)
木元聖奈(社会福祉法人 グロー) / 鈴木京子(社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会)
村山太郎(厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部企画課自立支援振興室)

進行 | 大谷 燮(特定非営利活動法人 ダンスボックス)

事業を展開する上での課題

大谷 | 事業を進めていくなかで、難しかったことはどんなことですか？

岡部 | 奈良県での大きな課題は発表の場が少ないこと。美術分野では、病院や裁判所、大学など展示場所を開拓しています。舞台芸術分野でも同様に、既存の劇

場に限らず、発表の場を開拓することが肝心だと考えています。

野崎 | 事業メニューにある「公演」を行うにあたり、目標をどう設定するのかが悩みました。事業の大きな目標である「舞台芸術のすそ野を広げること」に対して、障害のあるパフォーマーを育て作品をつくって公演するのか、人材育成プログラムの成果や途中経過を発表するのか

……私たちは人材育成プログラムの成果について発表することにしました。

坂野 | 舞台芸術はジャンルが多岐にわたりますから、焦点をどこに当てたらいいのかは今でも悩むところです。ニーズを把握するためにオーディションを開催したものの、余計に取捨がつかなくなりましたが、反面、新たな発見もありました。たとえば、刃物に恐怖を感じる障害者ご本人が、豆腐を手刀でうまく切る演技を披露してくれました。思いがけないものでしたが、誰でもできるのではなく、日常のなかで培ったリスペクトすべき立派なパフォーマンスだと思いました。

鈴木 | 連携事務局として相談を受けるなかで、「この事業で求められているのは何か」「ノウハウのない状態から何を始めたらいいいのか」という声をたくさん聞きました。アドバイスとして、専門性が必要となる分野ですから、地域の公共文化施設に連携や協力を仰ぐといった仕組みづくりが必要ではないかと話しました。

必要な人材と、人材をどう育成するか

大谷 | 福祉現場が舞台芸術に取り組む上でどのような人材支援が必要ですか？

岡部 | 表現には「非日常的な表現」と「日常的な表現」の2種類があると思っています。アートや舞台芸術というと、非日常的な表現を思い浮かべがちですが、表現の根源は日常にあって、周りの人たちが気づけるかどうか。いろんなサインに気づける人材が増えれば、おもしろい才能や可能性を発掘できるのではないのでしょうか。

木元 | 支援する施設職員などが「アートやパフォーマンスはわからない」と思わなくなるようにできたらと思っています。職員も利用者さんと一緒に活動したり、自身も表現したりしてみることで、おもしろさや醍醐味がわかると、日常のなかで利用者さんの表現を見つけられるのではないかと。研修も1回だけではなく、継続することも大事だと思っています。

坂野 | 「一人ひとりの豊かな生活を実現する」ためにケアプランがありますが、福祉サービスだけで組み立てられることがあります。そうではなく、本人が望む余暇や文化活動をプランに落とし込んでいけるかどうかも重要です。福祉で凝り固まっている相談員や施設職員には、施設での美術や舞台芸術活動が障害のある方の暮らしに有効に作用するという話をして回りました。

野崎 | 舞台芸術のスキルがある人たちのなかには、障

害のある人、子ども、お年寄りなど、専門家以外と活動することに興味を持つ人もたくさんいると日々感じていました。出会うきっかけがないだけで、場や育成プログラムをつくれれば、福祉現場で舞台芸術を指導できる人材を増やせると考えています。

鈴木 | アーティストと障害のある人をつなぐコーディネート的な役割ができる人材がいるといいのではないかと考えています。障害の特性や身体的な機能などについて知識やノウハウを持っていて、アドバイスできる人材です。また鑑賞支援については、福祉の現場で培われてきたノウハウが活躍するところです。日々障害のある方と接し、さまざまな特性をわかっている福祉関係者が一緒に公演を観に行くことも鑑賞支援の一つになると考えています。福祉側から文化施設に鑑賞支援の方法を提案できることもあるのではないのでしょうか。

さまざまな人がかかわる重要性

大谷 | 障害者の舞台芸術活動を広げるには、どのような支援や仕組みが必要だとお考えですか？

岡部 | 3点あると考えます。1点目は福祉や美術、舞台芸術以外の異分野とつながること。たとえば、奈良県ではアートイベントよりグルメイベントのほうが集客できます。人が集まるからという理由ではなく、異分野と結びつくことで今までにない出会いが生まれる。地域での根づき方も強くなるのではないかと思います。2点目は舞台芸術を自分たちの楽しみだけではなく、地域の人たちに必要とされるにはどうしたらいいのかを考えること。当財団では「わたぼうし語り部」といって障害のある方が小・中学校を回って民話や創作童話、自分史などを語ることを仕事にしている事例もあります。県内でそういった取り組みができればと考えています。3点目はアーカイブすること。舞台芸術はライブがほとんどですから、記録して映像化し、シェアしていくことも大事です。共有することによって、世界中の人びとに観てもらえるなど、チャンスが生まれると思います。

野崎 | 障害者の舞台芸術活動を普及することが、県内あまねくいろんな人が舞台芸術をしている状態と仮定するならば、地域にある福祉施設にアプローチすることが大事です。しかし今回、私たちが普段の活動拠点で

障害のある人の特性をわかっている福祉関係者が一緒に公演に出かけることも鑑賞支援になる——鈴木

ある横浜市以外でプログラムを展開しようとしたら、受け入れていただくことが難しい状況がありました。時間や人材なども関係しているのですが、福祉の現場で仕組みとして舞台芸術が入り込める余地をつくるのができたら、普及につながるのではないのでしょうか。

近 | 新潟県で全国からさまざまな才能を持つ人を発掘しようと開催したイベント「あしたの星☆」では関係者など参加者が200人近くいて大変盛り上がったんです。しかし「観客が少ないのがもったいない。おもしろいんだから、いろんな人たちに観てもらったほうがいい」という意見もありました。今回は子どものダンスチームを招待して発表してもらうことで、保護者をはじめ、関係者を呼び込むなど、いろんな人たちに観てもらう仕組みを考える必要があると思いました。あと、施設を回って出演者をスカウトする際に、大学教授に頼まれて学生にも同行してもらいました。施設などに行った経験もない学生でしたから最初は戸惑っていましたが、回を重ねるごとに慣れてきたようです。各施設の利用者さんも交流するなかで、「これ歌いますよ」など話が弾み、みんなにとっていい機会になったと思いました。

坂野 | 新潟県では情報保障を担える人材が足りていません。観る側が増えないと表現する側も増えないと思います。また、チームを組むことの重要性を感じました。「あしたの星☆」開催に当たって、近さんはネットワークや拡大していく力をお持ちで、私自身は前職経験から助成金に関する知識やノウハウがあります。そのほかメン

バーには美術や音楽関係者がいて、役割分担ができていたんです。チームが有機的につながることが、さらに成熟させるためには、福祉や美術、舞台芸術分野だけに限らず、それぞれの道のプロとつながることが大事で、つなげるのがこの事業の役割かなと思います。

木元 | 活動の場と発表の場、どちらも広げていくことが必要です。普段の活動をいろんな場所で展開するのはもちろん、舞台芸術は表現する人と観る人の間に生まれるものなので、発表にも取り組んでいくべきと考えています。拍手や脚光を浴びたい

人は喜びや興奮で、舞台芸術にのめり込んでいきます。滋賀県での取り組みを見ていると、日常の活動自体も大切ですが、それ以上に年1回開催する音楽祭をみなさんが楽しみにされています。発表の場は、大きなホールでなくても、地域の多目的スペースなどでいい。発表の場があることが大事です。

鈴木 | 舞台芸術のかかわり方について「日常的な表現」「非日常的な表現」「トップレベルを狙う」「アーティストとして活躍する」など複数の選択肢があるべきで、その環境をつくっていくことが必要です。すそ野を広げる普及支援と同じように、障害のあるアーティストがトップをめざすための支援があればと思います。たとえばスターが出ることによってすそ野も広がっていくのではないのでしょうか。また、若手アーティストが福祉現場で自分の取り組みを活かせる、しかもそれが仕事につながっていけば、自ずと人材も増えていくのではないかと考えています。

大谷 | 私自身は障害のある人、ない人が一緒に行く舞台芸術活動にかかわって20年ほどが経ちます。20年前あるいは10年前と比較しても、今のようによくさんの支援組織はありませんでした。そのなかで障害のある人、ない人が一緒になって活動していける状況がようやくスタートすると実感しています。舞台芸術で表現することは、想像力や身体力、コミュニケーション能力が開発される一つの機会になると思っています。新しい可能性が生まれ、自らが楽しみ、解放されるだけでなく、関係のある周囲の人たちや観客に楽しさを提供していく、そのようなことに発展しつつあると感じました。

左上 | 活動報告会の様子 右上 | トークディスカッションの様子 左下 | 北海道・北東北ブロックの報告では「北海道新篠津高等養護学校演劇部」による舞台も 右下 | 長崎県の支援センターの報告では「瑞宝太鼓」の演奏も



発表は、地域の多目的スペースなどでもいい。場があることが大事です。——木元

全国の取り組みを振り返って | 美術 |

連携事務局 / 美術分野

社会福祉法人 グロー (GLOW) ~生きる事が光になる~ 齋藤誠一

全国の取り組みを振り返って、連携事務局の役割を考える

2014(平成26)年度、障害者の芸術活動支援モデル事業の開始当初、5カ所で産声を上げた障害者芸術文化活動支援センター(当時は、障害者芸術活動支援センター)は、3年の取り組みを経て、現在は全国23カ所に支援センター、広域センターが設置され、障害者の芸術文化活動支援を行っています。また、18(平成30)年度からは支援センター事業の実施主体は都道府県となり、より地域の実情に沿った芸術文化活動支援が全国に広がっていくことが期待されます。

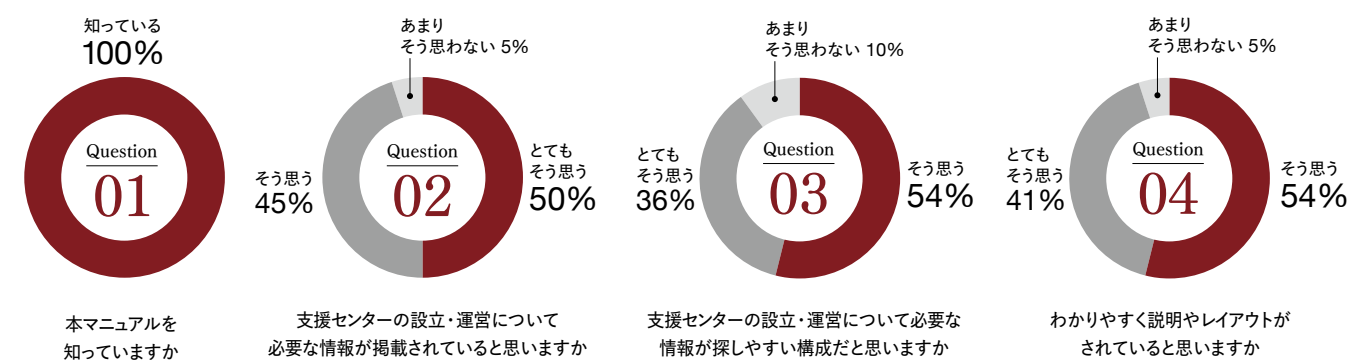
グローは、モデル事業の開始当初から連携事務局を4年間担わせていただきました。16(平成28)年度は、モデル事業が終了する年度にあたり、当該年度の実施団体10法人と連携して「障害者芸術文化活動支援センター設立・運営マニュアル」を制作しました。そのような状況のなか、今年度は実施団体数が2倍以上に増え、広域センターという新たな枠組みも登場したことから、連携事務局の役割を再整理しながら事業を実施した年でもありました。これから47都道府県に支援センターが普及し、全国どこに住んでいても、障害のある人が芸術文化活動に参加できる環境が整っていくことを期待しつつ、本稿では、発行した「マニュアル」の有用性と今年度の美術分野の取り組み成果から連携事務局の役割について振り返ります。

マニュアルの有用性について

今年度の支援センターへマニュアルの活用状況等についてアンケートを実施し、マニュアルの有用性について検討しました。

障害者芸術文化活動支援センター設立・運営マニュアルに関するアンケート結果

対象者 | 「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」実施団体22団体(グローを除く) 回答率 | 100%



Question 05
本アンケート項目で「あまりそう思わない」「思わない」とお答えいただいた項目について、修正・追加した方が良くと思われる点などご意見をお聞かせください。
(自由記述 一部紹介)

- 情報の検索については、やや探しにくいと感じています。全体の情報量が多いので、しょうがない部分もあると思いますが、WEBなどでよくある質問などを掲載するとか、もう少し簡単な体裁にしても良い。
- 初年度の活動だったため、マニュアルを見ても実際の事業をイメージすることが難しかった。ただ、連携事務局に直接お話をうかがうことで今年度実践することを明確化することができた。
- 支援センターの運営は、各地域の現況に合わせて、やりながら考えなくてはいけない部分が多く、マニュアルが有効であると思われなかったため、あまり参照しませんでした。改めて拝読すると、今後活用できそうな部分があるかもしれません。

Question 06
本マニュアルをご活用いただいている場合、どんな場面かを具体的に教えてください。
(自由記述 一部紹介)

- 相談事例は参考にさせていただいています。また、講師一覧が実は参考になっています。
- 相談があった時の対応や、支援センター運営の際に課題に直面した時の参考資料として活用しています。
- 都道府県内の実態を把握するためのアンケート調査項目は、参考にさせていただきました。
- 協力委員会や評価委員会の運営方法については、読み込ませていただき議題設定などに活用しています。
- 作品の調査・発掘のアンケート、各書式などを活用させていただきました。
- 広域ブロック内を巡回する際に、持参して事業説明資料として活用させてもらっています。
- 「取組事例」を読ませていただき、情報発信の事業検討の際に参考にさせていただきました。
- 相談支援の部分で、担当スタッフ間で読み合わせをして、学び合いを行ないました。
- 事業を行っていく上で項目ごとに目を通しながら事業を行いました。
- 展覧会への出展依頼の方法や様式を参考にさせていただきました。
- 未実施県で行った実態把握のアンケートの際、項目を参考にさせていただきました。
- 相談対応や展覧会の開催について事例と手順を参考にしていました。
- 未実施県が視察に来られた際の事業説明資料として活用しました。
- 相談に対する回答や報告書の作成など事業運営の各所で参考資料として活用しています。
- 事業全般について役立っています。

Question 07
本マニュアルの内容および記述の誤りなどにお気づきの際は、ご指摘ください。
(自由記述 一部紹介)

- 誤りではありませんが、今後も新たな(契約書や承諾書などの)様式などがあれば追加してほしいです。

相談支援の対応や会議の運営、実態把握のアンケートなどについて、参考になったという意見が複数の支援センターからありました。また、障害者芸術文化活動支援センターが何をやる機関なのかについて説明する資料としても活用いただけていることがうかがえます。一方で、「必要な情報は掲載されているのだろうが情報量が多くてわかりにくい」「マニュアルに書かれている内容だけでは実際の事業をイメージしにくい」などのご意見もあり、今後の改訂に向けた課題も見えてきました。また、「地域の実情に応じて活動が多様であるため、マニュアルは適さないのではないか」という意見もあり、支援センターが全国に普及していくなかで、マニュアルをどのように活用するのかについても今後連携事務局で検討すべきです。

連携事務局の役割を考える

美術分野では、取り組む事業の一つに展覧会があります。展覧会を開催し、作品を多くの人に鑑賞いただくこと自体も大きな成果ですが、展覧会を実現させるプロセスで、そこにかかわる人や機関の出会いからネットワークが生まれ、育まれたり、支援者や関係者の意識が変化したり、人材が育成されていくことも同様に大切な成果と考えます。展覧会開催により培われたノウハウやネットワークが、その地域でさらに大きな事業を成し遂げていく実績も、複数年取り組まれている実施団体の成果として現れ始めています。また、トット基金の「トットARTSフェス」(p19参照)やグローの「発達障害者との鑑賞プログラム」(p27参照)にあるように、特定の障害の種別に配慮しつつ、障害の有無にかかわらず参加し、楽しみを共有できる取り組みも身近な地域で障害のある人が芸術文化活動に参加する環境を整えていく上では大切な取り組みだと考えます。

今後、連携事務局としては、支援センターが取り組むべき基礎的な事柄を整理しつつマニュアルを改訂していくことに加え、先述した誰もが参加できる機会のように当該地域内で成果を得ている取り組みを丁寧に把握し、そのノウハウを全国に普及させていくことに地道に取り組んでいくべきだと考えます。

全国の取り組みを振り返って | 舞台芸術 |

連携事務局／舞台芸術分野

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会 鈴木京子

各団体の活動を通じてわかったこと

舞台芸術における今年度の取り組みについて、連携事務局の立場として振り返って感じたことは、ほとんどの団体が事業に取り組むにあたって、どのようなプログラムでどうアプローチしていけばよいかわからないというハードルがスタートを阻んでいるということでした。

支援センターと広域センターともに採択された団体の多くは、これまで舞台芸術に関する活動や事業をあまり行っていなかったために、舞台芸術に関するノウハウや舞台芸術分野の専門性を持つ団体や個人とのつながりも薄かったことが一つの原因であると思われます。一方、採択団体のなかには、舞台芸術活動団体や長年にわたり舞台芸術活動を行う団体も数団体あり、採択団体間のノウハウや活動状況の差も大きく隔たりがあったように感じました。

支援センターを支援する広域センターにおいても、支援センターが舞台芸術分野の活動に関して抱える課題をどのようにサポートしていけるのか、また担当地域の現状把握や「障害者芸術文化活動普及支援事業」未実施県へのアプローチ方法などに悩んだこともあったようです。

また、同事業の必須メニューとして、日々の活動を発表できる機会として公演などを行うことになっていました。舞台公演やコンサートなどを開催するには、専門人材や舞台制作のノウハウ、広報など、専門性を求められることから、「公演をしなければならない」ということに縛られ悩んだ団体もありました。発表公演は、本人の自己評価の向上や自己受容、観客となる他者とのつながり、双方の理解をうながす場として必要だと思いますが、公演を一つのゴールととらえて日々の表現活動を行うこと、さらに舞台芸術活動に関心を持つ障害者を増やし、すそ野を広げるための鑑賞の機会を創出していくことも大切です。



知的・発達障害児（者）にむけての劇場体験プログラム「劇場って楽しい!!」(大阪府)



「糸賀一雄記念第十六回音楽祭」(滋賀県)



「大阪府芸術文化オープンカレッジ」(大阪府)



予測・分類不能なパフォーマー
発掘オーディション「あしたの星☆」(新潟県)



福祉施設間のパフォーマンスワークショップを
交換するプロジェクト「エクステンジワークショップ」(奈良県)

「障害者芸術文化活動普及支援事業」に求められること

障害者芸術文化活動普及支援事業の舞台芸術分野での支援について求められていることは、障害者の表現活動がより多様化し、誰もが表現に触れ、活動できる環境をつくることであると考えています。また、舞台芸術分野における表現活動や参加が、社会や本人にとってどのような価値を生み出せるのかを実践を通じて検証していくことも必要です。

舞台芸術活動における意義や価値を考えることをテーマに事業を行った「たんぼの家」(p30～31)のように、今後このテーマについて福祉と舞台芸術双方の分野で協働し、継続していくことが誰もが舞台芸術に参加できる環境づくりにもつながっていくと思います。

残念だったのは、演劇や音楽の鑑賞支援への取り組みが少なかったことです。鑑賞する機会を求めている障害者は多いものの、劇場や文化施設などで鑑賞できる機会は少ないのが現状となっています。福祉のノウハウでは鑑賞支援までは難しいという考え方もありますが、劇場や文化施設は福祉のノウハウを求めています。福祉のノウハウがあれば、劇場や文化施設は鑑賞支援に取り組むこともできるのです。地域の障害のある人と一緒に演劇やコンサートなどに出向く鑑賞会などを劇場や文化施設に相談しながら、開催するのも鑑賞支援となるのではないのでしょうか。

連携事務局（舞台芸術）の役割

1年の活動を振り返って思うことは、モデル事業では対象ではなかった演劇や音楽など舞台芸術に関する取り組みにおいて、各団体が多くの課題を見つけることができたと思います。そのなかには、福祉分野と舞台芸術分野の人やノウハウをつなぐことによって解決できることもたくさんあると感じました。

幸いなことに、当法人が運営する「国際障害者交流センター ビッグ・アイ」は福祉施設であることから、福祉分野の団体や個人、教育機関とはつながっており、最近では劇場や文化施設とのつながりも広く持てるようになってきました。この強みをもっと活かすことができればと反省も含めて、今後は福祉と舞台芸術をつなぐ大きな役割を担っていることを再認識できました。

福祉と舞台芸術にかかわる人が出会う場、協働できる場をつくり、補い合うだけでなく、新しい環境づくりができると考えています。誰もが舞台芸術に触れ、参加できる機会を全国に普及していくために、連携事務局が福祉と舞台芸術をつなぐプラットフォームとなれるよう取り組んでいかなければならないと考えています。

数値で見る実績

「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」において、支援センター20カ所、広域センター3カ所で、地域の障害者の芸術文化活動に関する支援を行いました。各センターでの相談件数、研修会や展示会、舞台公演の実施回数について、数値で振り返ります。

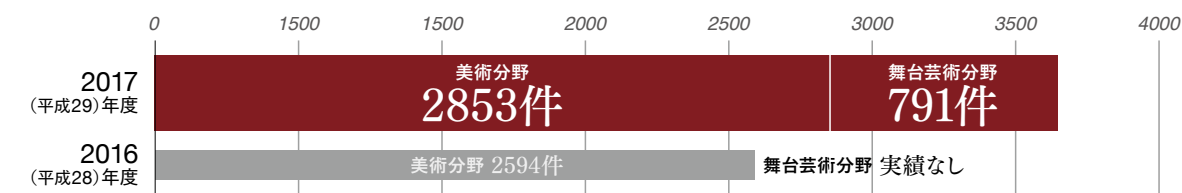
対象分野(23カ所)

広域センター | 3カ所 (美術・舞台芸術の両分野)

支援センター | 20カ所 (内訳 | 美術のみ5 / 舞台芸術のみ4 / 美術・舞台芸術の両分野11)

相談

相談件数 2017年 | 3644件(美術分野・舞台芸術分野) 2016年 | 2594件(美術分野)



美術分野 | 相談対応を実施したのは23のセンターのうち20カ所で、なかには舞台芸術のみを対象としているのに美術の相談対応も実施したセンターもありました。今年度新規に立ち上がったセンターに比べ、「障害者の芸術活動支援モデル事業」から継続しているセンターのほうが相談件数は多い傾向にあります。

舞台芸術分野 | 相談対応を実施したのは23のセンターのうち18カ所でした。今年度からスタートした新分野ですが、相談件数で見ると全体の約20パーセントにとどまっています。今後さらに周知・広報していく必要があると言えます。

研修会

実施回数



障害者の芸術文化活動を支援する技術や知識を身につける人材育成セミナーや現場での実践に関するワークショップなどの研修会が、23のセンターで合計175回実施されました。内容や地域を変えて10回以上実施しているセンターも8カ所ありました。

参加者数

175回実施で3601人が学びました。1回あたりの平均参加者数は約20人で、比較的小規模な研修が各地で実施されていたことがわかります。



展示会などの美術企画

出展した障害のある人



展示会などの美術企画を18のセンターが開催し、1122人の障害のある作家が出展しました。障害のある作家の出展者数をもっとも多かったのは埼玉県で、322人が出展しています。また、4カ所のセンターの美術企画では、障害のない作家が合計16人参加していました。

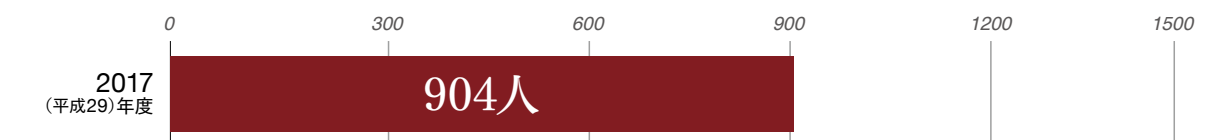
来場者数



18のセンターによる美術企画の来場者数は4万8604人でした。昨年度より人数は減少していますが、いずれのセンターも数百人～数千人規模で集客しており、障害のある作家が作り出した美術作品への社会的な関心の高まりと地道な広報活動などが実を結んでいると考えられます。

公演などの舞台芸術企画

出演した障害のある人



公演などの舞台芸術企画を18のセンターが開催しました。出演者数は、人数をカウントできた16のセンターの合計で1433人、うち障害のある出演者が904人で63%を占めていました。障害のある人とない人がともに舞台に立ち、作品づくりに取り組んでいたことがわかります。

来場者数

16のセンターによる舞台芸術企画の来場者数は7472人でした。そのなかには、障害のある人も多く含まれ、障害のある人が舞台芸術を鑑賞する貴重な機会となっていました。



ウェブサイト 記事投稿数



23のセンターのウェブサイトで、本事業に関する記事が582件投稿されました。各センターの投稿数は、20件以下=11センター、21~50件=8センター、51件以上=4センターでした。

メディア掲載数



新聞や雑誌、テレビ、ラジオなどのメディアによって、本事業が取り上げられた件数は161件でした。最多の掲載数は山梨県のセンターで33件。一方で掲載がなかったセンターも4カ所あり、本事業の周知において、メディア活用に可能性がありそうです。

ウェブサイト アクセス件数



各センターが投稿した本事業に関する記事へのアクセス件数について、調べることでできた18のセンターで合計17万3941件のアクセスがありました。最多のアクセス数は3万7521件で、最小は200件でした。



全国の障害者数データ

	面積 (km ²)	総人口 (人)	高齢化率 (%)	障害者数 (人)	身体障害者手帳交付台帳登録数 (人)	療育手帳交付台帳登録数 (人)	精神障害者保健福祉手帳交付台帳登録数 (人)	特定疾患(難病)医療受給者証所持者数 (人)
全国	377973.89	127,907,086	26.8	7,168,468	5,148,082	1,044,573	974,336	1,477
北海道	83423.84	5,370,807	29.6	277,574	187,746	41,717	48,030	81
青森県	9645.64	1,323,861	30.4	61,870	37,935	12,609	11,319	7
岩手県	15275.01	1,277,271	30.9	64,908	43,413	11,693	9,787	15
宮城県	7282.22	2,319,438	26.0	74,280	49,813	11,029	13,412	26
秋田県	11637.52	1,029,196	34.1	69,640	54,316	8,928	6,388	8
山形県	9323.15	1,118,468	31.2	67,672	53,642	8,439	5,565	26
福島県	13783.90	1,938,559	28.7	89,499	59,402	17,473	12,613	11
茨城県	6097.19	2,960,458	27.0	128,451	89,898	21,878	16,671	4
栃木県	6408.09	1,991,597	26.4	83,438	55,518	16,456	11,456	8
群馬県	6362.28	1,998,275	27.7	70,306	45,270	14,100	10,927	9
埼玉県	3797.75	7,343,807	25.0	242,227	153,960	38,955	49,262	50
千葉県	5157.61	6,283,602	25.8	198,605	123,385	33,710	41,468	42
東京都	2193.96	13,530,053	22.5	661,342	467,203	85,650	108,365	124
神奈川県	2416.17	9,155,389	24.2	203,432	99,707	25,069	78,597	59
新潟県	12584.15	2,300,923	30.3	92,872	63,646	12,467	16,717	42
富山県	4247.61	1,074,705	30.5	43,161	29,057	7,765	6,326	13
石川県	4186.05	1,153,627	28.0	44,469	28,335	8,642	7,481	11
福井県	4190.51	794,433	28.6	51,910	39,565	6,369	5,967	9
山梨県	4465.27	844,717	28.5	49,616	35,875	6,331	7,404	6
長野県	13561.56	2,126,064	30.0	116,234	76,912	20,023	19,259	40
岐阜県	10621.29	2,066,266	28.3	102,323	69,512	18,098	14,702	11
静岡県	7777.42	3,756,865	28.0	115,213	74,098	19,158	21,924	33
愛知県	5172.92	7,532,231	24.0	220,932	123,821	35,418	61,630	63
三重県	5774.41	1,841,753	28.0	99,494	72,959	13,933	12,581	21
滋賀県	4017.38	1,420,260	24.6	59,751	39,572	13,080	7,082	17
京都府	4612.20	2,569,410	28.0	98,801	67,650	10,893	20,212	46
大阪府	1905.14	8,861,437	26.2	276,604	146,103	46,034	84,337	130
兵庫県	8400.94	5,606,545	27.0	177,311	101,706	34,757	40,785	63
奈良県	3690.94	1,380,181	29.1	75,547	53,862	11,863	9,798	24
和歌山県	4724.64	984,689	30.9	56,916	40,370	9,652	6,885	9
鳥取県	3507.13	575,264	29.9	40,980	28,553	5,442	6,981	4
島根県	6708.26	696,382	32.6	50,067	36,014	7,491	6,544	18
岡山県	7114.32	1,927,632	28.8	57,223	32,362	11,190	13,520	151
広島県	8479.63	2,857,475	27.8	93,620	46,994	15,068	31,508	50
山口県	6112.53	1,408,588	32.5	73,536	50,545	11,929	11,051	11
徳島県	4146.80	764,213	31.0	50,492	37,337	8,062	5,050	43
香川県	1876.77	997,811	29.6	39,360	26,712	7,240	5,396	12
愛媛県	5676.23	1,405,325	30.8	65,830	43,557	13,461	8,796	16
高知県	7103.86	732,535	33.1	38,888	27,239	6,372	5,265	12
福岡県	4986.52	5,126,389	26.0	172,664	108,348	24,894	39,360	62
佐賀県	2440.68	837,977	28.0	57,370	43,082	8,855	5,424	9
長崎県	4130.88	1,392,950	30.0	64,638	38,639	14,737	11,252	10
熊本県	7409.48	1,798,149	29.1	90,391	62,023	11,886	16,461	21
大分県	6340.73	1,176,891	30.7	60,644	41,635	9,937	9,047	25
宮崎県	7735.32	1,119,544	29.9	63,207	44,138	11,244	7,815	10
鹿児島県	9187.01	1,668,003	29.7	100,835	68,730	18,829	13,261	15
沖縄県	2280.98	1,467,071	20.1	78,655	52,651	15,349	10,655	0

●面積 | 国土交通省 国土地理院：平成29年全国都道府県市区町村別面積調(平成29年10月1日時点)
 ●人口・高齢化率 | 総務省：住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数(平成29年1月1日時点)
 ●障害者数 | 厚生労働省：平成28年度 福祉行政報告例/身体障害者手帳交付台帳登録数、療育手帳交付台帳登録数
 平成28年度 衛生行政報告例/精神障害者保健福祉手帳交付台帳登録数、特定疾患医療受給者証所持者数

平成29年度

障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

2018（平成30）年3月31日

企画・発行

平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局

美術分野 | 社会福祉法人 グロー（GLOW）～生きることが光になる～

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2

TEL: 0748-46-8118 FAX: 0748-46-8228

MAIL: artbrut_info@glow.or.jp URL: <http://renkei-sgsm.net/>

舞台芸術分野 | 社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会（国際障害者交流センター ビッグ・アイ）

〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1

TEL: 072-290-0962 FAX: 072-290-0972

MAIL: arts@big-i.jp URL: <http://big-i.jp/>

連携事務局

齋藤誠一、竹岡寛文、木元聖奈（社会福祉法人 グロー（GLOW）～生きることが光になる～）

鈴木京子、宮脇真喜子、小森利絵（社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会）

発行責任者

北岡賢剛（社会福祉法人 グロー（GLOW）～生きることが光になる～ 理事長）

草川大造（社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会 理事長）

制作コーディネート

一般社団法人 ノマドプロダクション

デザイン

LABORATORIES

編集

『engawa』 今井 浩一

写真協力

特定非営利活動法人アートNPOゼロダテ、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン、

社会福祉法人みぬま福祉会、社会福祉法人八ヶ岳名水会、特定非営利活動法人楽笑、一般財

団法人たんぼの家、特定非営利活動法人コミュニティリーダーひゅーるぼん、特定非営利活

動法人らいふステージ、社会福祉法人愛隣園、社会福祉法人みずほ厚生センター、社会福祉

法人ゆうかり、社会福祉法人ゆうゆう、社会福祉法人愛成会、社会福祉法人みんなでいきる

印刷・製本

株式会社シュービ

助成

厚生労働省 平成29年度 障害者芸術文化活動普及支援事業

